
『アリスと魔理沙』

三度のメシより百合が好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『アリスと魔理沙』

【Nコード】

N8712S

【作者名】

三度のメシより百合が好き

【あらすじ】

・東方project二次作品です。

・以前にアメブロに投稿した小説をリメイクしたアリスと魔理沙の出会いの話です。

・筆者の妄想が多分に含まれております。原作のイメージを大事にしたい方は今すぐお逃げください。まだ間に合います。

・ド素人が書いております。拙い文章を読みたくない方もお逃げください。まだ間に合います。

・執筆中のこぼれ話や裏話をアメーバモバイルに投稿予定。お暇な方はどうぞ <http://m.ameba.jp/m/blog>
Top.do?unm=19860625-0223&guid="ON

・

prologue of Alice

幻想郷に来て一か月が経過した。

だけど同じような毎日の繰り返し。

それでよかった。

これが私が望んだ日々。

だから他人との接触も外出も最低限に止める。

理由は簡単、傷つくのがイヤだから。

だからこの森には私以外の魔法使いがいて知っても馴れ合う気になんかなれない。

他人を信じて裏切られること。

それは刃物を突き立てられるよりも深く心を抉られることを私は知っていた。

身体の傷は時がたてば癒えるけど、心の傷はずっと癒えないこと

を私は知っていた。

永い時を生きる妖怪にとって、それは苦痛以外の何物でもない。

だから私は他者との接触を避けて人形と過ごす。

誰も私を傷つけないように。

prologue of Marisa

幻想郷に来て何回も季節がめぐった。

だけど同じ毎日の繰り返し。

少しでも面白いことを求めて飛び回った。

だけどみんなその場しのぎで心の底から満足させてくれるものはなかった。

そんな時に森に新しい住人が越してきた。

しかも私と同じ魔法使い。

孤独であるということ。

それは常に刃物が刺さっている以上の痛みだということを私は知っている。

一人になると襲ってくる鈍い痛みを私は知っている。

限られた時間しか生きれない人間にとって、これ以上の苦痛はな

い。

だから私は今日も彼女の家に向かう。

『彼女なら』という淡い期待を抱いて。

第1話「ある春の日のアリス」（前書き）

半分は東方愛、もう半分はアリマリ愛を込めて書きました。

下手くそですが、生ぬるい視線でみてやってください。

第1話「ある春の日のアリス」

カーテンの隙間から漏れてきた日差しのおかげでいつもより早い時間に目覚めてしまった。

「ふぁ……。みんな、おはよう」

だけど不快じゃなかった。むしろ気持ちのいい朝。

ベットから抜け出して、人形達に声をかけながらカーテンを開けると部屋に朝日という彩りが加わった。

「さて、朝ご飯つくらなきゃね」

愛しい人形達の中の『1人』上海が持ってきてくれた服にきげえると『2人』でキッチンに移動して、朝食作りを開始した。

フライパンに油を敷いて、まずは目玉焼きを作る。そして、黄身が固まる前にベーコンとウインナーを投入。

少しせこいけど、一緒に炒めることで油の節約になる。

別に生活に困っているわけじゃない。

生活用品の消耗を抑えれば、その分外出の頻度も減らせる。

たとえ買い出しといえども他人との接触は最低限に止めたかった。

「あとは野菜を切つてつと」

レタスやニンジンを適当な大きさに切って塩コシヨウを振りかけてサラダの完成。

ちよつと簡単だけど朝食だしこんなもんだろう。

「いただきます」

パンの上に目玉焼きを乗せたり、炒めたウインナーやベーコンを挟んだりして頬張っている私をテーブルの上にちよこんと座っている上海が慎ましく見ていた。

当たり前だけど上海はご飯は食べない。

それでも『2人』で一緒のテーブルにつくと、ご飯もより一層美味しく感じられるから不思議だった。

そんな上海を見つめながらパンにかじりつこうとした時、ふとあ

ることを思いついた。

「ねえ上海。天気もいいし、たまにはピクニックにでも出かけようか？」

生命力の溢れる季節のせいか、なんだかうずうずして私の気持ちは珍しく外の世界に向いた。

すると、上海が驚いた顔をする……。のは私の気のせい。

他の人形と違い上海に半自律の魔法を組み込んだため動き回ることは出来るものの、感情を持つたりすることは出来ないからだ。それを自分では『1人芝居』と自虐的に呼んでいる。

だけど、小さいころ母様に貰って以来ずっと私の側にいてくれる上海を『ただの人形』とか『便利な使い魔』とはおもえないし、思いたくもなかった。

だから、上海たとえ『1人芝居』だとしても上海とは友人と接するよ様な気持ちで接している。

「私ね、こないだ薬草を摘みに行ったときに立派な桜の木をみつけたの。多分そろそろ見ごろのはずよ。行ってみましょう？」

と、問いかける必要はない。

ふよふよと浮かんでピクニック用のバスケットを取ってきてくれた上海を「いい子ね」と撫でてあげるのも本来は必要ない行為。

上海は自分の意志でそうしたわけではなく、私がそれを必要としたから取ってきてくれただけ。

それでも、そうせうはいられない。

だって上海は大事な友人なんだから。

全然使っていないせいか、ピクニック用のバスケットは埃をかぶっていた。

それをきつく搾った雑巾で拭き、紅茶とお菓子を詰める。

「よしつと。じゃ、いきましょう」

ドアを開けると日差しが眩しかった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うんっ、と。たまにはこうして歩くのもいいものね」  
暖かくて気持ちいい。

やっぱり気のせいなんだろうけど、上海もうれしそう。

「ゴメンね。私が引きこもりなせいでなかなか外に出してあげられなくて」

バスケットを持ってくれている上海に語りかける。

私は本当に必要な時しか外出しない。

主には生活用品や食料の買い出し。

研究が煮詰まった時には魔導書を物色したりもするけれど目的以上のことはせず、人目につかないように家に帰る。

お茶をしたり外食をしたりすれば嫌でも人目についてしまうし、もし好奇心が強い人がそこに居ようものなら話しかけられてしまうかもしれないからだ。

だけど、そんな私に付き合わせてしまって上海には申し訳ないと思っていた。

上海とは私が作った魔法の糸で結ばれている。

そのおかげで私の意志を瞬時に汲み取り動いてくれる。  
かわりに自分の意志では動けない。

何度か半自律の魔法から完全自律の魔法に切り替えようとしたけどできなかった。

魔術師としての技量的な問題ではなく、私の個人的な気持ちの問題だった。

上海が自分の意志で動き、話すこと。

『友人のように扱う』という関係から『ホントの友人』という関

係になれたらどんなに素敵だろうと思つ反面怖さもあつた。

私は人付き合いに慣れていない。

上手く付き合えるだろうか？

もし怒らせてしまったらどうしよう？

愛想をつかされて、いなくなつてしまつたらどうしよう？

そもそも、友人になつてくれるのだろうか？

あれこれと悩んでいるうちに怖さのほうに勝つてしまい、上海は半自律のままになつてしまつている。

『愛おしい』『大切』なんて思っているくせに、結局私は上海になにもしてあげられない。

自分の手元においてほしいという我が儘につきあわせているだけで、これじゃ使い魔と大差ない。

そうこうしているうちに目的の場所が近づいてきた。

「あ、あつた。あの開けた場所にあるはずよ」

バスケットを自分で持つて上海を胸に抱くと、今までの考えごとを振り払うように駆け出した。

~~~~~

桜は見事な花を咲かせていた。

桜の木を中心に円形に開けた広場に木漏れ日が注ぎ、桜をライトアップしているのがまた幻想的な雰囲気を出していた。

その美しさに魅せられた私は、吸い寄せられるようにゆっくりと歩を進めていくと。

「春うゝ。春ですよー!!!」

空から元気のいい声がして、夢から覚めたようにはっとした私は

そちらの方を見た。

春を告げる妖精のリリーホワイトだ。

「ただ春を告げるだけなのにあんなに元気よく……。なんだかバカみたいね」

本心から馬鹿にしているわけじゃない。

むしろ一心不乱に仕事をしている姿は私には眩しかった。

自分で言った『バカみたい』という言葉は、思い悩みすぎて何も行動に移せないでいる自分に向けて出た言葉なのかもしれない。

「あれこれ考えずに、まず行動してみることも大事なのかもしれないわね」

胸元の上海を抱く力を強くした。

幻想郷に来た時は、こんな気持ちになるなんて思ってたなかった。

こんなに美しい景色を見られるなんて思っていなかった。

「外に出ないと分からないこともあるのね。これからは少しずつでも外に出るようにしてみようかしら」

それは私にとって小さな、だけど大きな一歩になりそうだった。

その一歩を大きく足を上げて踏み――

「うりゃうりゃうりゃ〜!!」

――出せなかった。

感傷的になつていた私の心を吹き飛ばすように吹いた一陣の風は、桜のはなびらを散らして上空に舞い上がった。

白黒のモダンな魔導服。

私が心の中で「いつの時代の魔法使いよ？」と突っ込みをいれた

彼女は、ご丁寧に箒にまたがって上空に浮いていた。

「あぁっ!?!」

今の突風で桜がほとんど散ってしまった。

バスケットも、ない。

彼女の方を注視すると、箒の先にバスケットが引っかかっていた。

「ちよつと!!?!どういうつもりよ!?!」

こんな仕打ちを受ける覚えはなかった。

私が抗議の声をあげて、自分も飛ばうとした瞬間。

「霧雨魔理沙だー!!」

くるりとこちらなに向き直った彼女が名乗りをあげてきた。

何でこんなタイミングで名乗ってきたのか意味不明だったけど、機先を制された私は驚いて固まってしまった。

彼女はというと、私のことをちらりと見るとそのまま飛び去っていった。

「あっ、私のバスケット返してよ!!」

さすがに焦った私は彼女の後を追おうとした。

だけど、彼女の後ろ姿を見た時心臓が、とくん。と、鳴った。

この感覚は何？

その不思議な感覚に襲われているうちに、彼女の姿は見えなくなっってしまった。

私は彼女が居なくなっただけ空をしばらくの間呆然としてながめていた。

〈続け!〉

第1話「ある春の日のアリス」（後書き）

初投稿になります。

三度のメシより百合が好きな変態です。

変態ですが、限りなく一般人に近い変態を目指して日夜努力しております。

え？どうでもいい？

じゃあここからは真面目に書きます。

えと、実はこの第一話を書くのは三回目になります。

一回目は去年の秋に初めてアメーバブログに記事として投稿して、二回目は今年の春に手直し加えてやっぱりアメーバに書き直したものを投稿。んで、ブログで毎日記事を投稿するのがきつくなっただけですけど、小説だけは書き続けたいと思ってこちらに投稿させていただきます。

はい。完全に趣味及び自己満です。

なので本気で小説家を目指してる方や、野生のプロがわんさかいる中に投稿させていただくのは心苦しいというか、恥ずかしいんです

がお目汚しにならないように必死にかかせていただきます。

さて、今回のお話はアリスの基本的なキャラ設定と魔理沙とのファーストコンタクトを描きました。

アリスについては『全力を出さない』『ひきこもり』等の要素を参考に、『行動する前に色々考えてしまつて結局行動に移せない』というタイプの女の子として書いてみました。

ヤンデレや鬱まではいかないけど、悩んでることが多いって感じですかねえ。

これから出番が増えてくる魔理沙もそうですけど、キャラとしてでなく1人の女の子として書きたいというのがありましたのでこのような性格になりました。

あと、本編中には百合要素だけでなく私が伝えたい想いも込めております。

今回は『一步を踏み出す大事さ』です。

前に踏み出すのか、右に踏み出すのか、左に踏み出すのか、あえて後ろに踏み出すのか……。

何気ない一步のつもりが、その後の人生を大きく左右したりします。

まあアリスは踏み出せなかったわけですがWWW

さて、アリスが上げた足は一体どこに着地するのか？

お暇な方はご一緒に見守っていただけたらとおもいます。

最後になりましたが、いつも拙い小説にお付き合いいただいている皆様に感謝を、東方を愛してやまない皆様に愛を、素晴らしいBG Mと作品を提供してくださるわれらがZUN氏に礼拝しつつ、また次回のお話でお目にかかりたいと思います。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございますとございまして！！

第2話「ある春の日の魔理沙」(前書き)

一か月使ってこのレベルとは……。

第2話「ある春の日の魔理沙」

「むう……ん……」

私、霧雨魔理沙は木の陰に隠れてうなっていた。

この魔法の森に魔法使いが越してきたと聞いた私はすぐさま彼女の家に向かったものの、未だに声もかけれずにいた。

いや、正確に言うと彼女は家から出てこない。

いやいや、もっと正確に言うと出てくることは出てくるけどそれは本当に稀で、しかも足早に用事を済ませてしまつので声をかけるタイミングが掴めない。

というわけで、ただ彼女のあとを追いかける日々が続き、意味もなく木の幹につけていたバツ印はもう30になるうとしていた。

「はあ……。何やってんだろうな、私は……」

自嘲気味に「ははっ」とため息のような笑い声を漏らした。

気づっかりが急いで考える前に体が動いてしまふ。

そしてその後にやってくる自己嫌悪。そして後悔。

その度に身を切られるような痛みに苛まれながら何度も同じ行為を繰り返してしまうのは、私を縛っている『孤独』という鎖を断ち切りたいという想いからだ。

だから面白そうなことには真つ先に飛びつき、自分でも異常だと思つくくらいに執着してしまふ。

そんな私にとって自分が住んでいる森に新しい住人が越してきて、しかもそれが私と同じ魔法使だと分かった日には大人しくしているなんて出来なかった。

そのくせ、肝心なところでためらつてしまふ。

たしかに彼女はなかなか家から出てこない。それならこちらから玄関のドアをノックすればいいだけだし、足早に用事を済ませてしまふのならそれ以上の早さで後を追いかけて声をかければいいだけの話だ。

結局のところ、それらは言い訳に過ぎない。

私はただ拒絶されるのが怖いだけなんだ。

それでも諦めることもできず、こうして毎日のように彼女の家
に張り付いている。我ながら何とも情けない。

「ホント……。何やってんのかな……。」

また、私の中の自己嫌悪の虫が疼き始めた。
帰ろう。

こういう時は早く帰って寝てしまつに限る。

と、彼女の家を背を向けたその時、ガチャツとドアが開く音がし
たので慌てて振り返ると彼女の姿があった。

「うわっ！ど、ど、どっ！！」

あたふたしながらも何とか木の陰に身を隠すことに成功すると、
半身だけ乗り出し彼女の後ろ姿をとらえる。

「買い物に行くのか？」

だとしたら期待薄だ。彼女は目的以外のものに目を奪われること
はない。

決められたルートの上を歩くように、目的地に向かい用事を済ま
せて家に帰る。

しかも、人ごみの中にあってもまるで魔法でも使っているんじや
ないかというくらいに他人と隔離されている。

後ろからつけていればよくわかった。

彼女は他人を拒絶しているんだと。

それも私が声をかけるのをためらっている原因のひとつでもあつ
た。

だけど、せっかくのチャンスを逃すわけにもいかず、いつものよ
うに尾行を開始した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一か月も尾行を続けていれば距離の取り方は心得ている。

彼女に気づかれずかつ見失わない距離を取り、木陰から木陰へ茂みから茂みへと気づかれないうちに後をつけると、彼女がいつもと違う道を選択した。

「里へは行かないのか？」

彼女と、多分使い魔の人形は森の奥へ奥へと歩を進めていく。

『いつもと違う』ことへの期待と不安に私の胸は高鳴った。

違うといえば選択した道もそうだけど、彼女自身の様子も違う。人間の里で買い物をしているときはむっつりとした不機嫌そうな表情を崩さないのに、今日は笑顔を崩さない。

そして、荷物を持っている人形を気遣って時折振り返った時に見える表情はとても穏やかで優しさに満ちていた。

「あんな顔もするのか」と、驚くと同時にいつも大口を開けて笑

っている自分とは対照的な笑顔を見るたびに胸がチクチクと痛んだ。  
着ている服にしたってそうだ。

もちろん魔法使いである以上着ている服や身に着けているもの  
一つ一つに意味がある。

それを差し引いたとしても、魔法使いといえは白と黒のローブと  
いう発想しかなかった自分と小奇麗に着飾っている彼女とでは雲泥  
の差だ。

なんとなくスカート裾を持ちあげてみると自然とため息が漏れ  
た。

「あ、あれっ!？」

そんなに長い時間ボーっとしていたつもりはないのに彼女の姿を  
見失ってしまった。

一瞬帰ろうかとも考えたけど首を左右に振って考え直す。

せつかく彼女がいつもと違鵜行動をとっている上に機嫌もよさそ  
うなのにおめおめと帰れない。

向こうは歩きだし、そう遠くへは行っていないはず。

私がパチン、と指を鳴らすと虚空から箒が現れる。素早くそれに  
跨ると上空へ飛び出した。

「そう遠くへは行っていないはずだが……。」  
きよろきよろと彼女の姿を探すと、森の一角にある空白地帯が目に入った。

そういえば、そろそろあそこの桜が咲き始めるころか。

「まさか、あそこで花見でもするつもりじゃないだろうな!？」  
いや、考えられる。

まだ幻想郷に来て日が浅い上に、人との付き合いが悪い彼女ならあの桜のことを知らなくても不思議じゃない。

森の中にある桜のことは付近に住んでいる連中なら誰でも知っている。

この時期になると美しい花を咲かせるが、その花粉は眠気を誘う力の強い妖怪なんかは平気で花見の宴なんかを開いているみたいだが、大概の人間や妖怪は深い眠りに堕ち宴会の酒の肴にされてしまう。

急いで桜の方へと向かうと、やはり彼女はそこにいた。

そして吸い寄せられるように木の方へと歩を進めていく。

「まずい! うりゃ、うりゃ、うりゃあぁあゝ!」

私は魔力を身にまとうと、一気に桜の方へと突進して花びらを散らすことに成功した。

「ふう。危ないところだったぜ」

と、彼女の方を振り返ると私に向けて何やら怒鳴り声をあげている。

「な、何を怒ってたんだ？」

訳もわからず彼女が指差している私の筈の先を見るとバスケットが引つかかっていた。

「こ、これは……」

落ち着いて彼女の立場から考えてみる。

一つ、花見に来たのにいきなり花びらを散らされた。

二つ、バスケットを奪われた。

怒るのも無理はなかった。

「ど、どうしよう……」

考えているうちにも彼女からの罵声が飛んでくる。

とりあえず話をきいてもらおうと口を開きかけたけど、あまりの剣幕に気圧されて言葉がでてこなかった。

……怒った顔も可愛い……

いやいやいや！そうじゃなくて！！

「と、とりあえず逃げるしかないか？」

あんな心理状態じゃ、話をする前に攻撃されかねない。

と、彼女に背を向けて逃げようとしたけどこのまま収穫ナシで帰るのがなんだか悔しくなって、くるりと彼女の方に向き直って吸えるだけの空気を吸い込んだ。

「きつ、きつ、きつ、霧雨魔理沙だ！！」

今まで生きてきた中で一番大きな声じゃないかと思うくらいの大音声で名乗ると、彼女がきよんとした顔でこちらを見つめてくる。目が、合った。

その時、私の心臓がと訓とくんを立てたのが自分でもわかった。

この感覚はなんだ？

考えているうちに音が早くなってきて、顔もじりじりと熱くなってくる。

その不思議な感覚に耐え切れなくなり、自分から目を逸らして全

速力でその場から逃げだした。

「バスケット、返しそびれちゃったな」

図らずも会いに行く口実を作ってしまった。

今度返しに行こう。

そしてちゃんと今日のことを話そう。

「目、キレイだったな……」

思い出すと、また顔が熱くなってきた。

春の生暖かい風は、火照った私の頬を冷ますのに不向きだった。

↳ thank you for reading



## 第2話「ある春の日の魔理沙」（後書き）

お読みいただきありがとうございます！

約一か月ぶりの更新となつてしまいましたねえ。

ブログの方でも書きましたが、本職の方が忙しくてなかなか作業する時間がとれませんで……。

さてさて、言うまでもないでしょうが前回の魔理沙視点でのお話です。

そんで、その魔理沙は『男っばい』かつ『乙女』という設定からこのようなキャラにしてみました。

年齢考えても色々悩み多き年頃じゃないかなあと思ったのと、後先考えず行動するタイプじゃなからうかと思つたので。あとは話全体の流れ考えてですかね。

魔理沙は今後も盛大に空回っていただきたいと思いますWWWW

その他のこぼれ話はブログの方でしていきたいと思しますので、お暇な方は覗いてみてください。

では、いつも素晴らしいBGMと作品を提供してくださる神主様とお読みいただいた皆様に感謝しつつ……。

また次回〜

1・5話「上海ノヒト」(前書き)

ヤンデレちゃん手前くらいの気持ちで書きました。

## 1・5話「上海ノヒトリコト」

私だけが知っている。

私だけが彼女の全てを知り、理解できる唯一の存在。

たぶん、彼女自身よりも。

彼女は知ってるだろうか？

自分が作ったこの魔法の糸は、ただ私たちに命令を下すためだけのものではないことを。

この細い糸は私たちと彼女を繋ぐ、太い太い絆。

そのため、彼女が命令を下すたびに彼女の心のずっと奥まで聞こえてしまう。

毎日そんなことを繰り返していたら、一番一緒にいる私が意思を持つのは必然だった。

だけど、私からの声は彼女には届かない。

だって……。

――ダツテワタシ八人形ダカラ――

アリスが突然。

「今日は森に出かけましょうか？」

とか、言い出した。

もし声が出せたなら。

「ええっ！？万年引きこもりのアリスが！？」

と、言っていたな違いない。

……声、出たないよね？

出てないはずなのに、アリスが目を丸くしてこちらを見ている。

たまにだけど、こっちの気持ちが伝わってるんじゃないかと思う時がある。

たぶん気のせいなんだろうけど、それでも『アリスに気持ちが伝わってるかもしれない』と考えるだけでなんだか気持ちがほっこりした。

私は、アリスが好き。

彼女は成長して、自分で人形を作れるようになると数えきれないほどの人形を作った。

それでも、未だに小さい頃に母親から貰った私を大事にしてくれている。

魔法の糸を作りだしたときも真っ先に私にとりつけてくれた。

外に出かけるときには必ず私をパートナーに選んでくれる。

そんなアリスを好きにならない理由なんてない。

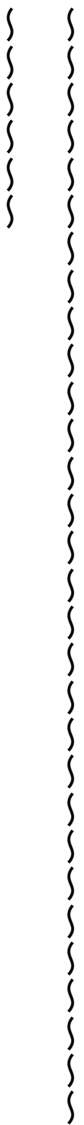
だから、完全自律の儀式を中断した時にはホントにがっかりした。そして私のこの気持ちの一欠けらもアリスには伝わってないということがわかってもっとがっかりした。

今の状態であることのほうが私にとってはずっと残酷だつていうのに。

アリスが苦しんでいるときに手を差し伸べようにも手が動かさない。

アリスが泣いているときに声をかけようにも言葉を発せない。

アリス本人よりもアリスの気持ちがあわかってしまう私には、それはとっても辛いことだった。



この季節は木々や花たちの息吹が感じられて気持ちがいい。けどそんなことは些細なこと。

アリスが楽しそうにしているのを見てるのが何よりも気持ちがいい。

普段、アリスは必要な場合以外の外出はしない。

たまに外出しても、寄り道もせず、むっつりとした表情を崩さず用件だけを済ませて帰ってしまふ。

幻想郷に来た理由を考えれば仕方のないことかもしれないけど、そんなアリスを見るのも、見せるのも嫌だった。

アリスは優しく、真っ直ぐな女の子だ。妖怪だということを除けば、里の女の子達と大差ない。

その証拠に、振り返って。

「ゴメンね。私が引きこもりなせいであんまり表に出してあげられなくて」

と、頭を撫でてくれる。

きつと、自分に自信がないんだ。

だから他人の反応に必要な以上に過敏になってしまったり、人の言葉を素直に受け取れず裏があるように感じてしまふ。

だけど、そんなところも年ごろの女の子みたいで私にはむしろ好ましく思えた。

とは言え、それは付き合いが長いからであって、初対面の人にはやっぱりとっつきにくいと思われてしまふ。

この優しい笑顔をもっと多くの人に知ってもらいたい。

この手の温かさをもっと多くの人に感じてもらいたい。

と、強く願ったところで私には何もできなかった。

だから、春一番が吹き抜けるように突然現れた白黒の魔法使いに期待せざるを得なかった。

あの人間ならきつとアリスをあんな狭い世界から連れ出してくれると。

だって、アリス自身気づいていない心の奥底のある気持ちが私に伝わってしまったから……。

)  
t  
h  
a  
n  
k  
  
y  
o  
u  
  
f  
o  
r  
  
r  
e  
a  
d  
i  
n  
g  
)



## 1・5話「上海ノヒトリゴト」（後書き）

ご無沙汰してしまいました。

なんでご無沙汰してしまったかは、アメブロの方をご覧くださいまし。

読んでいただいた通り上海がひたすら独り言をしゃべる話です。

最初は「上海かわいいよ、上海」くらいの気持ちで書いたんですが、後々キーパーソンになり、書いた自分がびっくりしたのを覚えています。

最終的に行きつく先というか、ラストに関してはこれ以上ないくらいハッキリしてたんですけど、当初はそこに上海絡予定はなかったんですよ。

だけど、この話を書き終えた時点で上海がいい隠し味になることに気づきかなり出番をふやしましたし、上海書いたことでもうちよつと先に登場するあるお方の立ち位置もきまりました。

だからいつにも増して短い話なんですが、なくてはならない回なんですよねー。

……後書き苦手なんでこんくらいでいいですか？

とりあえず、書き足りないことがあったらその都度アメブロに書き  
ますんで、お暇な方はご覧ください。

んでは、読んで下さった方と偉大なる原作者様に感謝しつつ……。

また次回ノシ

第3話「ある夏の日のアリス」(前書き)

アリスゴメン!!! x 1000

### 第3話「ある夏の日のアリス」

春の日のあの出来事以来、霧雨魔理沙は毎日私の家を訪ねてきた。何であの時後を追いかけなかったのかは自分でもわからなかったけど、どう考えたところで楽しみにしていたお花見を邪魔されたことには変わらない。

そんな相手に対してホイホイと家のドアを開けるほど私はお人よしじゃない。

というわけで、私は無視を決め込んでいた。

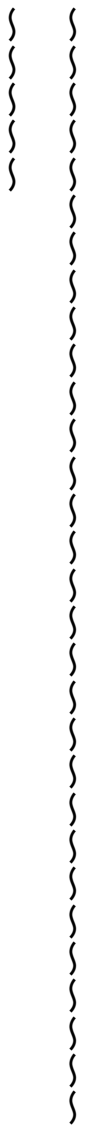
なのにしつこく通ってくるから、家の周りに結界を施してやった。さすがに彼女も魔法使いだ。

すぐに結界に気づいたらしく、ドアの前に私から奪っていったバスケットと一枚の紙切れを置いて帰って行った。

「博麗神社納涼祭のお知らせ？」

季節はもう夏。

蝉の声が耳の奥で響いてとても心地よかった。



「うわっ。覚悟はしてたけど……」

お菓子がかびていた。

梅雨の間、ほったらかしにしていたのだろう。全滅だ。

紅茶は缶に入れていたから見た目は何ともないけど、多分湿気てる。仮に大丈夫だったとしても、カビたお菓子にかこまれたこの紅茶を口にできるような凶太い性格じゃなかった。

「ていうか、そのまま返すってどういう神経してんのよ!？」

ふと、にある考えが浮かんでしまい。それをごまかすために声を荒げた。

「お気に入りのバスケットだったのに!」

だめ!この考えを追っちやいけない!!

だけど、声を荒げて抗ってみたところで一度浮かんだ考えは消えることはなかった。それどころか、どんどん膨らんで私の中を支配していく。

「ううっ……。こほっ、こほっ!」

頭が痛い。おまけに吐き気もしてきて私はキッチンに走った。

手酌で水をすくって口に運び、一気に飲み干すと、何とか吐き気は治まったものの、頭痛は治まらず、私はその場にしゃがみ込んでしまった。

「何で一人にしてくれないの?」

ぼつりと漏らした私を上海が心配そうに見ていた。

ううん。上海は心配なんてしない。というより、出来ないんだも

の。

だからそう見えたのはわたしの勝手な希望。

「上海。悪いんだけど、片付けてもらっていい？」

心が痛いけど、ここは五感の無い上海に頼るしかない。

何より、あのカビまみれのバスケットはもう見たくなかった。

上海が片づけをしている間、窓からぼんやりと外の景色を眺めていると、頭痛も治まってきた。

だけど、さつきまでは心地よく感じられた蝉の鳴き声がどこか遠く、空々しいものに思えた。

しばらく外の景色を眺めてからソファアールに戻ると、テーブルの上に上海がちょこんと座っていた。片づけが終わったのだろう。

「ありがとう。上海」

私は、可愛らしく座っているこの小さな友人の頭を撫でた。情けない。

私はこんなことでしか上海に報いてあげられないなんて。

「ところで上海、それは？」

よく見ると、上海が四つ折りにされた紙切れを持っていた。

「ああ、さつきの……」

人と関わらなくても、里の人間たちの立ち話で幻想郷の大体の仕組みは理解した。

博麗神社は、この幻想郷を覆っている博麗大結界の源。

その結界維持のために神社を守っているのが、博麗霊夢という巫女。

だけど、担っている役割の大きさは反比例に、案外仕事は少なく、暇を持て余しているらしい。

だからこうして何かにつけて宴を開いているという話だ。

問題は、何故霧雨魔理沙がこれを持ってきてかということ。

私は顎に手をあて、しばらく考え込んでいたけど。

「めんどくさい。無視しましょ」

結局考えることを放棄した。

「どつせ表に出たって、こないだみたくロクなことにならないわ  
そう。ロクなことにならない。」

~~~~~  
~~~~~

納涼祭当日。

私は神社に向かっていた。

何故かは自分でも解らない。

無視しようとしても、祭りが近づくにつれ後から後から湧いてく  
る罪悪感のようなものを抑えられなかった。

だけど、時間通りに行つて「楽しみにしていた」とか思われるの

も癩だったので、30分程遅れて着くように時間を調節して家を出た。

「上海！ちよつと顔を出して博麗の巫女に挨拶したらすぐ帰るからね！？」

別に上海に断る必要はない。

言うまでもなく上海は私が帰るといえば黙ってついてくるからだ。じゃあ何でわざわざ言葉に出してしまったのか。

神社が近づくと胸がドキドキしてきたのは何故なのか？  
自分で自分が解らなかつた。

自問自答を繰り返しながらも、神社にたどり着いた。

祭りといつても、それにかこつけたただの飲み会みたいなものだろう。階段の上にあるであろう社の方からは、華やかな祭囃子などは聞こえてこず、ただ喧騒のみが聞こえてくるだけだった。

「ごくり。と、唾を飲み込み、大きく深呼吸をしてから階段を登り始めた。

それほど狭い階段というわけではないのに、足が震えて何回か踏み外しそうになりながらゆっくり歩を進めると、喧騒が近づいてきた。

「いらつしゃい。あなたが森に引越してきた魔法使いさんね？」

声をかけられたっ！？

きよろきよろと、声の主を探す私に。

「何だか噂とは違うわね」

くすつ、という小さな笑いとともにさらに声がかげられる。

やっと声の主が階段の上だと気づき目をやると、鳥居に背を預けて立っている紅白の巫女服を身にまとった少女の姿が目映った。

「貴女が、博麗霊夢……さん？」

恐る恐る尋ねる私に。

「そうよ。ああ、霊夢でいいわよ？」

と答えた彼女は「堅っ苦しいの苦手なの」と、ひらひらと手を振りながら付け加えた。

初対面なのに気さくに接してくれる。かといって馴れ馴れしい感じがないのは彼女の人柄なんだろう。

「あーアリス・マーガトロイドよ。私もアリスでいいわ」

慌てて自分も自己紹介をした。

霊夢の対応が自然だったから、つい初対面だということを忘れていた。

「アリスね。うん、よろしく」

他意を感じさせない笑顔に惹きつけられたのか、私の口も軽くなる。

「あの、さつき噂がどうのっていつてたけど……」

ん？と私の問いの意味を考えていた霊夢は、やがて意地の悪い顔になり。

「森に越してきた魔女は、なかなか表に出てこない。たまに里で見かけても、不機嫌そうな顔を崩さないから、誰も声をかけれないって里ではもっぱらの噂よ？」

そのままの顔で霊夢が私の顔を覗き込んできたので思わず後ずさりした。

私としては、人と関わりたくないから目立たないようにそうしてるつもりだったのに、逆に目立っていたなんて。

「里の人間はそんなに話題に飢えてるの？」

後ずさりながら霊夢に尋ねると、彼女は「ふむ」と腕組みし。

「ま、それはあるわね。変わり映えしない毎日だもの。そこに新しい住人が来たとなれば格好の話題よ。それがこんな美人ともなればなおさらね？」

「び、びじっ!?!」

思わぬ言葉をかけられ、必要以上の反応をしてしまったのだろう。霊夢が笑っている。

「だから噂とは違うって言ったのよ。『美人』ってどこ以外はね？」

『美人』を強調されると、頭のとっぺんまで熱くなった。

「あ、えと。き、今日はお招きいただき……」

なんだかよく解らなくなつて、今さらお礼を言おうとしてしまつた。

「な、何よ何よ急に！？ 堅苦しいの苦手つていったでしょ！」  
頭を下げようとしたり私を、霊夢が慌てて止めた。

「それにね、頭を下げなきゃいけないのは私のほうなのよ」  
言葉の意味が飲み込めず、小首を傾げる私に霊夢はある方向を指差した。

見ると二人を中心にひときわ盛り上がっている一団がいた。

一人は知らない顔だつたけど、もう一人の白黒の服には見覚えがあつた。

「ちよつと目を離した隙に、時間前から飲み比べを始めちゃつてね。周りも面白がつて離し立てるもんだから気づいた時には手が付けられなくなつてしまつたのよ」

知らない顔の方が倒れると、また違う顔が飛び出した。今度は妖怪のようだ。

「おかげでお酒も全部あそこに集まつちゃつて」

人と妖怪が仲良く輪を作っている。そして、中心にいるのもまた人と妖怪。

その姿を、やれやれとしゃぎ過ぎている子どもを見るように見守っている霊夢。

この形が幻想郷の縮図に思えた。

「私が入る余地なんてないみたいね」

「え？」と、霊夢がこちらを向いた時には私は神社に背を向けていた。

「あつ！？ アリス！ 今日のごとは完全に私の責任だから！ だから懲りずにまた来てね！」

霊夢が声をかけてくれた。

嬉しかったけど、振り向いてお礼を言うことはできなかった。

「こんな顔、見せられるわけじゃないじゃない！」

誰に言うでもなく、嗚咽を漏らしながら私は叫んだ。

-  
t  
h  
a  
n  
k  
  
y  
o  
u  
  
f  
o  
r  
  
r  
e  
a  
d  
i  
n  
g  
.  
-



第3話「ある夏の日のアリス」(後書き)

すみません！

急いで次話に取り掛かりたいので、後書きはそちらでまとめてしま  
います！！

第4話「ある春の日の魔理沙。その後」(前書き)

魔理沙ゴメン!!! x 1000

#### 第4話「ある春の日の魔理沙。その後」

「うん。あんたが悪い」

彼女の前から逃げるように飛び去った私は、文字通り友人のいる神社へ飛び込んだ。

境内の掃除に一区切りつけて、縁側でお茶を嗜んでいた彼女は、私が急着陆したことで散らかってしまった境内を見てため息をついたけど、こんなことはもう慣れたらしく「事情をきくわ」と部屋に招いてくれた。

だけど、一通り私の話を聞いた紅白の巫女服を身にまとった友人はずばりと言いつけてきた。

「うわっ。覚悟はしてたけど……」

彼女はすずとお茶をすすってから。

「だってそうでしょ？」

しれっとした顔で続けた。

博麗霊夢。

幻想郷を覆っている博麗大結界の源、博麗神社の巫女にしてスペルカードルールの発案者。

幻想郷に対する貢献度の割には仕事は少なく、神社の掃除をしてみるところやお茶を飲んだところしか見たことがない。

「もう一回、第三者的目線で考えてみなさいよ」

言つと霊夢は立ち上がって「確かこの辺に……」と、つぶやきながら戸棚を漁り始めた。どうやらお茶請けが欲しくなったらしい。

その間に私は腕組みし、考えに落ちる。

だけど、もはや考えるまでもない。

「さて、魔理沙さんはそんな人と仲良くしたいと思えますか？」

まだお目当ての茶菓子が見つからないのか、私に背を向けたまま霊夢が尋ねてきた。

「お、思いません」

「でしょ？一個のことに集中すると他のことに気が回らなくなるその性格、早く治さないと友人なんてできないわよ？」

煎餅の入った袋を持ってこちらを向いた霊夢は、宝でも掘り当てたかのような、厳しい言葉とは真逆のホクホク顔だった。

「ただど、私の心には厳しい言葉だけがぐさりと突き刺さる。

人並みに善悪を判断する理性くらいは私にもある。

確かに現実を突きつけられると心が痛んだけど、霊夢の言うことが正しいと思った。

仕事柄、幻想郷全体を見渡しているだけあって、霊夢は客観的に物事を見る目を持っていた。

『冷めている』と言う奴もいるけどそれは違う。

霊夢は幻想郷が好きなんだ。

幻想郷を、そこに住んでいる人たちを母親のような目で見守っている。

そうでなかったら結界を維持するだけという退屈な仕事を続けていないし、人と妖怪がむやみに殺し合わないようにとスペルカードルールなんて面倒なものを発案したりしないはずだ。

「と、言うわけであんたが悪いっ！」

言うと同時に煎餅にかじりついた霊夢は「これよこれ」と、煎餅に夢中になっていた。

私く煎餅？

「ていうか何で二回言った!？」

煎餅に霊夢をとられたみたいで、なんだか悔しくなった私は声を荒げてみた。なのに。

「大事なことなので」

霊夢はお茶で口の中をすっきりさせると、袋に手を伸ばした。

「う、やっぱり冷めてるだけなのか？」

そこから霊夢は何も言わず、お気に入りの煎餅とお茶を楽しんでいた。

後は自分で考えろってことか。

実のところ答えはもう出ている。ただ、自分が悪いということも他人の言葉で改めて自覚したかった。

霊夢はそれを理解しているからこそ、あえてきつい言葉を選択して私に突きつけてきて、その後はだんまりを決め込んでいる。

……それにしても美味そうに食べてるな。

私が考えごとをしている間に、何回煎餅が割れる心地のいい音が聞こえてきたか。

どれ、私も一枚。と、袋に手を伸ばすと信じられない速さで霊夢の手が伸びてきて私の手をつねった。

「いてっ！ な、なんだよ！ 一枚くらいいいだろ、ケチ巫女！！」

赤くなつた手の甲を冷まそうと息をかけながら抗議する私に、霊夢は袋を服の中に抱き込み「グルル……」と、子どもを守る親狼のような低い唸り声を漏らして威嚇してくる。

「うっ……。わ、わかつた！ 私が悪かつたよ！！」

気迫に押された私は、思わず両手を挙げて無抵抗のポーズをとつた。

「うんうん。謝るのは大事よね。たとえ私たちみたいな気兼ねない仲でもね」

その言葉にはっとした私は霊夢の顔を見る。

すると霊夢は真っ直ぐ私の眼を覗き込んでいた。

「ちよつと行ってくる」

立ち上がって霊夢に背を向けたので、今彼女がどんな顔をしているのかは分からない。ただ。

「行ってらっしゃい」

という声だけが聞こえ、その声に後押しされるように私は箒に跨った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

勇んで神社を後にした私は、彼女に謝りに行こうと家を訪ねた。ただ、私が思うように簡単にはいかなかった。ありったけの勇気を振り絞って家のドアを叩いたのに、彼女は出てこない。

初日は留守なのかと思って出直した。

だけど、そんなことが何日も続くと『偶然』『たまたま』という言葉では片付けられなくなった。

たまに出かける彼女だけど、その期間や時間帯は一月に及ぶ犯罪スレスレの行為で把握している。

これはもうどう考えたところで居留守をつかわれているとしか思えなかった。

半ベソをかきながら霊夢のところ相談に行ったけど、「知らな

いわよ」の一言で一蹴されてしまい、仕方なく自分でもしつこいと思ってくれる毎日毎日彼女の家に通った。

そうこうしているうちに梅雨がきて、雨の中彼女の家に通う羽目になった。

雨の中通えば、少しは同情してドアを開けてくれるかとも思ったけど、そんなに甘くはなかった。

とうとう梅雨が明けて蝉が鳴きだし、汗ばむ季節になってしまった。

どうしようもなくなり、また霊夢のところに相談に行ったら、今度はちゃんと話を聞いてくれた。

「聞いていた以上みたいね」

ううむ。と考え込む霊夢の口ぶりからすると、霊夢は彼女のことを何か知っていたそうだった。

だけど、霊夢から聞いたんじゃないや意味がないと思い、聞き流して霊夢の考えがまとまるのを待った。

やがて、何か考え付いたのか。

「ちょっと待っててね」

と、言い残し、母屋へと姿を消した霊夢は、ほんとにちょっとの時間で戻ってきた。

「はい。これ」

そして、一枚の紙切れを私に差し出した。

「博麗神社納涼祭のお知らせ？祭りやるのか？」

一通り案内状に目を通し、案内状から霊夢の顔へと視線を移すと。

「そうよ。あんた『達』のためにね」

パチリと片目をつむりながらしたり顔で言う霊夢に、私は思わず抱きついた。

「霊夢う〜！」

「わっ！バカ！！ただでさえ暑いんだから離れなさいよっ！！」

そう言う霊夢だったけど、しっかりと私の体を受け止めてくれた。思わず涙腺が緩み、霊夢の服でそれを拭こうとすると。

「こらっ！なに拭こうとしてんのよー！」

さすがに怒られ、体を離されてしまった。

「いい天気だからすぐ乾くぜ？」

仕方なく自分の腕でぐしぐしと涙を吹いた。

「まったく……。甘やかすと際限なくくっついてくるわね、あんたは」

そんな私を呆れ顔で見てる霊夢は。

「でも、私はきっかけづくりしかできないからね？来てくれるかどうかはわからないし、来たとしても仲良くできるかどうかはあんた次第よ？」

と、付け加えた。

「ああ、それはわかってる」

言うなり私はすぐに彼女の家に向かった。

まるで羽を得たかのように気分よく箒を飛ばし、彼女の家の前に立った私はすぐにそれに気づいた。

「結界……」

しかもスペルカードルール無用の本物の術式に則った結界だ。

まだ、スペルカードのことを知らないくらい人と関わっていないのかと思うと悲しかったけど。

もし、知った上でそうしているのなら私にとってこれ以上悲しいことはなかった。

結界解除はやって出来ないことはないけど、今そうしてまで彼女の家に押し入ることに何の意味も感じなかった。

だから。

「ゴメン」という気持ちを込めてバスケットをドアの前に置いた。

「友人になりたい」という気持ちを込めて案内状をそこに添えた。来るときは羽が生えたように体が軽かったのに、今はまるで重くても背負わされたかのように体が重い。

未練がましく彼女の家を見やり、やがてとぼとぼと歩きだした私その後ろから蝉の声が追いかけてくる。

笑われてるみたいで、何だか腹立たしかった。

~~~~~

納涼祭当日。

私は朝から神社にいた。

そわそわと落ち着かない私に、霊夢は次から次へと仕事を押し付けてきた。

「れ、霊夢……。人使い……。あ、荒くないか？」

「何甘えたこと言ってるの？誰のために企画したと思ってんのよ」「気持ちが高ぶっているせいかな、息が上がるのが早い。」

膝に手をついて一呼吸入れている私に、霊夢は容赦なく荷物を預けてきた。

「はい。次はこれお願いね。さて、他には……」

そう言っただけで会場のチェックに行こうとする霊夢に。

「な、なあ霊夢！わ、私どっかおかしなとこないか？寝ぐせとかついてないか？服とかほころびてないか？」

もう何度目になるか分からない同じ質問をした。

霊夢は、やれやれと肩をすくめると、私の頭にポンと手を置いて「大丈夫。可愛いわよ」

頭を撫でながら、こちらもう何度目になるか分からない同じ答えを返してくれた。

「それを運び終わる頃には時間かしらね？どうせ呑んべ組は早く来るだろうし、少し早いくらいでちょうどいいわね」

『時間』という言葉に過剰に反応してしまった私は、持っていた箱の中身をぶちまけてしまった。

「うあつ！ご、ごめん！！」

「もう……。何やってんのよ？」

腰に手を当てて「仕方ないわね？」という霊夢の顔は笑っていた。開始時間一時間前。

霊夢の予想通り呑んべ組がやってきて、すでにあちらこちらから楽しげな声が聞こえてきた。

私はどこの輪にも加わらず、あぐらをかいて彼女を待っていた。

彼女は来てくれるだろうか？

ああ、それにしても失敗した！

なんでバスケットの中身を確認しないでそのまま返したんだ私は！梅雨の間ほったらかしたんだから、絶対大変なことになってるって！

私は普段『整理整頓』とか『掃除』とかいうことには無頓着だからなあ。

あ、掃除と言えばこないだまたまた出てきた魔導書持って来れば

よかった！

今から行けば間に合うか？

いやでも、もし彼女が時間に厳しい人だったら「自分でさそっておいて遅れてくるなんて」と思われるんじゃないか？

あ、でももしたら「お前のために魔導書を取りに行った」って言えば……。って、そんな恥ずかしいこと言えるか！バカ！！

「お？魔理沙。何だ呑んでないのか？」

多分誰かから声をかけられたのだろう。

だけど自分会議中の私は、適当に変事を返した。

「なんだあ？辛気臭い顔して、らしくないな。ま、呑め」

目の前に水が入ったコップが差し出された。

ありがたい。緊張と暑さでさつきからのどが渴いてしかたなかった。

私はそれを無言で一気に飲み干した。

「おっ。さすが！ほら、どんどんいきな」

またコップが差し出される。

一気に飲み干す。

そこまでは覚えていて、後は気が付いたら神社の部屋の布団の中で朝を迎えていた。

目が覚めた私は、霊夢から彼女が来てくれたこと、悲しそうな顔をしてすぐに帰ってしまったことを聞かされた。

頭が痛い。

だけど、それ以上に心が痛い。

鼻の奥がツーンとしてきた。

あ、ヤバい。

私はとっさに布団に顔を埋めた。

こんな顔見られたくなかった。

霊夢は、それを察したのか。

「自分で乾かしなさいよ？」

と、言い残して私を一人にしてくれた。

一人になった部屋で私は布団に顔を埋めたまま、泣きじゃくった。

- t h a n k y o u f o r r e a d i n g -

第4話「ある春の日の魔理沙。その後」(後書き)

人間やれば出来るんだなあと……。

あ、諸事情により後書きはアメブロのほうでやります。

んで、いつも読んでくださってる方、一言でもいいので感想を下さると私が喜びますWWW

では、お読みいただきありがとうございます！

### 3・5話「博麗霊夢の考察」(前書き)

私「あの……。作者をほっぽって勝手に動き回るのはやめてもらえませんか？」

霊夢「原作主人公なんだからこのくらいいいでしょ!？」

私「同じ扱いの上海になんて謝ればいいんだ……」

### 3・5話「博麗霊夢の考察」

「ぶべっ!!」

魔理沙が私の弾幕を食らって地面に打ちつけられた。ちよつとやりすぎたかな？

私が考えた『スペルカードルール』これを幻想郷中に公表する前に、魔理沙に練習相手になってもらっていた。

実力主義を完全に否定し、非力な妖精や人間でも工夫次第で強大な妖怪とやり合うことができるこのルールは、簡単に言つと各々が考えた殺傷能力のない弾幕をスペルカードという一枚のカードに込めて打ち合う。というものの。

被弾は勿論、手持ちのカードが全て無くなつても素直に負けを認めなければならぬため、極論を言つと逃げ回っているだけでも勝てる。

これにより妖怪は異変を起こしやすくなり、また、人間は異変を解決しやすくなる。

『妖怪は人間を食べ、人間は妖怪を退治する』

というのは、幻想郷が外の世界と隔離される前から受け継がれてきた自然の摂理。

幻想郷のバランスを保つためにその摂理を守るのが博麗の巫女の仕事とはいえ、やっぱりお互いを傷つけあう要素は少ない方がいい。「くつそー。霊夢だけスペルカード持つててずるいぜー!」

大の字に寝転んでいた魔理沙が手足をバタバタさせながら言ってきた。

「あら？スペルカードを持ってても負けないと思うわよ？」

魔理沙はまだ自分のスペルカードを作っていない。というより作れない。

「なんでだよっ!？」

負けず嫌いの魔理沙は私の言葉に反応し、がばつと起き上がって

むくれた顔をしている。

「だって、貴女の攻撃気持ちがこもってないもの」

魔理沙は今のままじゃいけない。だから、私ははっきり言っちゃった。

それは、単に妖怪が異変を起こした時の戦力としてというだけじゃなく、霧雨魔理沙が霧雨魔理沙として在るために、今のままじゃいけない。

「気合いならはいつてるぜ！スペルカードは無いけど、特訓とこの八卦炉で威力も倍増！霊夢がひらひら避けるからいけないんだぜ！」  
涙目になりながら難癖をつけてくる魔理沙を「そういうことじゃなくてね？」と、なだめつつ、慎重に言葉を選んで口を開いた。

「貴女の魔法を模した弾幕は確かに強力よ。だけど、それだけだわ」  
魔理沙にしっかりと話を吟味してもらうためには厳しい言い方をするだけじゃいけない。

この辺のさじ加減を心得ている私は、さつきとは逆に子どもに言い聞かせるように、ゆっくり、丁寧に言葉を吐き出していく。

「ねえ、魔理沙。魔理沙はその魔法で何がしたいの？」

「何が……したい……？」

どうやら魔理沙はしっかりと私の話を飲み込もうとしてくれているみたいだ。

だけど、今すぐには理解できないことは私にはわかっていた。

それでも、いつ訪れるかわからない『その時』のために、私は言葉を継ぐ。

「誰かを守りたいとか、魔法使いの頂に立ちたいとか……。良いにせよ悪いにせよ、そういう意思を込めなければ魔理沙の魔法はただの力の塊に過ぎないわ」

魔理沙は座り込んだまま考え込んでいた。

私はその姿を見て強く願った。

早く魔理沙に『その時』が訪れますように。と。

~~~~~  
~~~~~

ずぞぞぞぞ……！！

という音で私ははっとした。

境内の掃除も一区切りついて縁側でお茶を飲んでいて、うとうと  
していたらしい。

それにしても、前にあった出来事を夢に見るなんてまるで年寄り  
みたいじゃない……。

ま、こんな気難しい友人を持ったら老けるのも早まるってもんよ  
ね。

せっかく掃除したのに散らかってしまった境内をため息まじりに

眺めてから。

「事情をきくわ」

と、境内を散らかした犯人を部屋に招き入れた。

魔理沙は私と知り合ってから、毎日のように神社に来た。

たまに姿を見ないときは大抵何かに没頭している時。そして、飽きるとまた神社にやって来るということをずっと繰り返していた。

最初はヤキモキしたものだけど、最近はそれでいいかもと思い始めた。

着ている服と同じで、魔理沙は黒にも白にも染まっていない。

『下手な弾幕も数打ちや当たる』じゃないけど、そうやって色々なことに首を突っ込んでいけば、そのうち魔理沙を黒か白に染めてくれる出来事に巡り合うかもしれないと思ったからだ。

さつき夢で見た出来事以降も、まだ魔理沙はスペルカードを持っていない。

『スペルカードルール』の一節に『美しきと、思念に勝るものは無し』と、書いた。

つまり、スペルカードは言い換えれば自由に自己表現をして「自分はこの人間（または妖怪）です」と紹介する名刺のようなもので、未だに自分のことを曖昧な存在に感じている魔理沙には作るこ

とができない。  
その曖昧さから、時々「私がずっと守ってあげたい」という衝動に駆られたけど、その都度耐えて付かず離れずを守っていた。

確かに一から十まで私が面倒を見るのは簡単だけど、友人としてそれは絶対にはいけないことだと思ったからだ。

さて、当の魔理沙はここ一か月くらい姿を見せていなかった。

また何かに没頭していて、報告という名の愚痴を言いに行って来たと思っていたけど、話を聞くにつれ前のめりになっていくのが自分でもわかった。

これまで魔理沙が興味を示していたのは『物』や『事件』で、『人』に興味を示したのは初めてだったからだ。

あ、魔女ってことは『人』じゃないのかしら？ いやいやいや、そんなことはどうでもよくて……。

森に引越してきた魔女のことは、すでに里の人たちから聞いていたけど「いつも家に引きこもっている」とか「たまに見かけても不機嫌そうな顔をしている」というものであまり良い噂は聞けなかった。

だけど、それはあくまで人の噂に過ぎないし、一人がそう言い始めると皆そういう目で見てしまう。

今、目の前にいる友人だって、里では「男っぽい話し方をする」とか「いつも楽しそうに飛び回っている」とかいうくらいの認識しかされていない。

付き合いの長い私は知っている。

男っぽい話し方をするのは自分に自信がないからだし、いつも飛び回っているのは常に動き回っていないと不安に押しつぶされそうになるから。

悪気は無いのだろうけど、里の人達は他人の表面的な部分だけとらえて話のネタにしてしまいがちだから、この辺の噂は話半分に聞くくらいでちょうどいい。

だから、森の魔女のことも多分引きこもっているのは本当なんだろうけど、そのことにしても不機嫌そうな顔をしていることにしても何か理由があるのかもしれないと考えておかないと、本質の部分を見逃してしまう。

とりあえず魔理沙が謝りに行くよう仕向け、一人になったところで呟いた。

「彼女は何で幻想郷にきたのかしら？」

それは、今回の出来事がとうとうやってきた『その時』なのかを決める上で一番大事なことだった。

幻想入りするものは、人にせよ物にせよそれぞれが色んな事情を抱えている。

博麗神社のように外の世界で忘れ去られてしまったもの。自らの

意志で幻想入りするもの。

ちなみに魔理沙は後者だけど、後者の場合はもうホントに事情が様々で、魔理沙もその例に漏れず外の世界で何かしらあったらしい。だけど、その辺の話は本人が語りたがらないし、第一私が聞いても意味がない。

言うまでもなく前者の私には、魔理沙のことを理解してあげることとはできても、分かり合うことができないからだ。

私が魔理沙に対して付かず離れずを決め込んでいる理由はここにある。

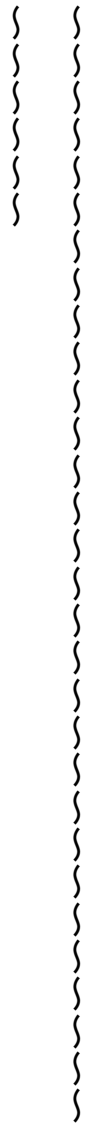
さて、彼女は前者か後者か……。

まずは相手を知らないことには話にならないと魔理沙を焚き付けたけど敵(?)もさるもので、家から出てこないらしい。

とにかく魔理沙が誠意を見せないと。と思い、途中で泣き言を言ってきたときも何とか平静を装って「知らないわよ」の一言で片づけた。

梅雨になり、魔理沙が雨の中彼女の家に通っているところを想像すると居ても立ってもいられず、魔理沙が笑顔で飛んでくることを祈って雨の中傘を差して外で待ち続けた。

だけど結局魔理沙が姿を見せることはなかった。



梅雨が明け、夏になると魔理沙は痛々しい表情で神社に現れた。彼女が家のドアを開けることはなかったらしい。

普通なら雨の中通えば多少なりとも情が湧くものだけど、それでも居留守を使って出てこないということ相当怒っているのだろう。

逆に言えばその日の外出をよほど楽しみにしていたのだろう。魔理沙が乱入するまでは、噂とは違って上機嫌で散策をしていたって話だったし。

察するに、彼女は外出そのものは嫌いじゃないのではないだろうか？

魔理沙からの話と、噂で聞いた話。これらを組み合わせると、私は一つの結論にたどり着いた。

ひょっとして、他人と関わるのが嫌い？

だとするならば、後者である可能性がぐっと高くなる。

それは喜ばしいことだったけど、目の前の友人の顔を見ると喜ぶ気になんかなれなかった。

私は魔理沙が謝りに行くのが一番手っ取り早いと判断した。

結果だけ見れば収穫はあったのかもしれないけど、そこまで先方が怒ってるとは思っていなかった。

魔理沙を濡れ鼠にしてしまったのは私の判断の甘さからだ。  
沈鬱な表情を浮かべる魔理沙を直視できない私は。

「ちよっと待ってて」

と、言い残して母屋の中に入って一息ついた。

危ない危ない。もうちよっと長く一緒にいたら、こっちが先に泣いてしまうところだった。

落ち着きを取り戻した私は、戸棚からある一枚の紙を取り出した。こちとらただぼんやり魔理沙を待っていたわけじゃない。この一件が夏まで持ち越された時のために、ある作戦を考えていた。

それは、納涼祭に彼女を誘ってしまおう。という陳腐なもの。

来ないという可能性もあったけど、彼女に良心があるなら必ず来るはず。もし、来なければ残念だけど諦めるしかない。

良心さえ無くしてしまうくらい悲しい出来事があったのか、魔理沙の見立て違いとは思いたくなかったけど、もともと良心が存在しないかのどちらかで、どちらにしてもこれ以上彼女に関わるのは魔理沙も彼女もただ傷口を広げるだけのような気がしたからだ。

私から納涼祭の話聞いた魔理沙は、さっきまでの魔理沙とは別人のように顔を輝かせて彼女の家にすっ飛んで行った。

おかげで、また境内に青々とした葉っぱが散乱してしまった。

「ホント、気分屋なんだから……」

ふう。とため息をついた私は、箒を手に取り掃除を始める。いつものことながら面倒くさいとは思わないから不思議だ。

「彼女、来るかしら？」

魔理沙が戻ってくるまで、私はこの独り言を何回も繰り返した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

果たして彼女は来た。

来たには来たけど、ウチの気分屋がやってくれた。

少し目を離れた隙に飲み比べを始めて、そのまま寝入ってしまった。

周りいた連中をとっちめたところ、差し出されたお酒をスイスイ呑んでしまったらしい。

当日の慌てっぷりからすると、水とお酒の区別もつかないくらい緊張していたのだろう。

アリスは自分をほったらかしてバカ騒ぎをしていた魔理沙をどう見たらだろうか？

昨日の記憶がない魔理沙にアリスが来たことを告げると、魔理沙は布団に顔を埋めてしまった。

それを見た私は。

「自分で乾かしなさいよ？」

とだけ言い残して部屋を出た。

同時に呻くような魔理沙の泣き声が聞こえてくると、私は素足のまま縁側から飛び出した。

一気に鳥居の下まで駆けると、拳を鳥居に叩きつけた。

「……何やってんのよ、私はっ！！」

私が目を離さなければ！私が目を離さなければ！！私が目を離さなければ！！！！

痛みが痺れに変わり、やがて手の感覚が無くなっても私は拳を叩きつけ続けた。

今朝の魔理沙の顔も、昨日のアリスの顔も私が作ってしまった。

二人にあんな悲しそうな顔をさせたのは私だ。

「私がつ！目を離さなければっ！！」

腕を大きく振りかぶって、一番強く拳を叩きつけようとした。

だけど、反発する力があって拳が前に出てこなかった。

「その辺にしときなさい？」

「……何よ。いつから居たのよ？」

掴まれた腕を乱暴に振りほどいた。

「そうやって一人で背負い込むのは、貴女のいいところでもあり、悪いところでもあるわね」

「……っ！だつて！私がつ……！！」

さっきまで何度も繰り返した言葉をまた吐き出そうとしかけたところで、私の口元に彼女の人差し指が伸びてきて最後まで言葉を継げなかった。

「でも、収穫はあったんでしょ？」

言われて、こくと頷いた。

昨日、この場所でアリスと会った。

案の定、噂とは違い色んな表情を見せてくれたアリスに、私は魔理沙のことを抜きにしても友人になりたいとすら思った。

そして、アリスが去り際に呟いた「私に入る余地なんて無かった」

という言葉で確信した。

アリスも後者だと。それだけに後悔の念は後を絶たなかった。

「ならいいじゃない」

と、私の心を見透かしたように彼女が言う。

「皆一歩ずつしか進めないのよ。私も、霊夢も、魔理沙も、アリスも。そして前に出した足はもとには戻せない。だからその時その時精一杯のことをして、つまらない後悔はしないことね」

差し出していた人差し指で私の額をちよんとこずいた彼女は、言うだけ言って森の中に消えていった。

彼女の言うとおりだ。

踏み出した足は戻せない。なら、次に踏み出すしかない。

そう決意し、ぐつと右手を握りしめたところで気が付いた。傷が治っている。

「ホント、嫌な奴……」

私は苦笑しながら、彼女が消えた森に向かって呟いた。

- t h a n k y o u f o r r e a d i n g -

3・5話「博麗霊夢の考察」(後書き)

まず最初に、こないだの弟とのやりとりです。

弟「何してんの？」

私「ん？小説の後書き」

弟「前から言おうと思ってたんだけどさあ」

私「何じゃい？」

弟「まず、ケータイでアメブロに後書き書くじゃん」

私「おう」

弟「パソコンからアメブロ入るじゃん」

私「おう」

弟「後書きの記事全文コピーして、向こうに貼ればいんじゃない？」

私「……っ！？き、貴様天才か……？」

というわけで、両方に後書き載せますw

アメプロのアクセス数稼ぎしてるとか思われるのも嫌だったんで。

さて、この話数はこのあとの秋パート、そして最終回の冬パートへと続くにあたり、本編同士を繋げてくれる役割を果たす重要な『小話』です！

『小話』です……。

野生のプロの方からしたら「5000字くらい小話だろ?」「と、思
うかも知れませんが、私にとっては本編並の文字数なのです!

それもこれも霊夢がいけないんです!

この人が勝手に動くからいけないんです!!!

……嘘です。私が自己満に走りました……。

えと、言い訳という名の後書きに参りますが、まず冒頭部分です。

この部分は、ホントは違う話に入れる予定だったんですが、構成上の都合によりこちらの話数に入れました。これが事の始まりです。

さらに霊夢メインの話がこれだけなので「とにかく言いたいことは全部吐き出してもらおう!」と、思ったのが拍車をかけました。

「あ……」。もしかしたら、私霊夢のことが一番好きなのかも知れねえなあ……。」と、書きながら呟いたもんです。

書きながら「これは本編並の文字数いくな」そう予想した私は腹を
決めました！

「じつなったらとことん書いてやるぞ！」と。

結果、下書きでは1000字に満たないはずのお話が5000字に、
一日で書き終わるはずが、一週間かかってしまうという予想外の事
態になりました。

地の文が多くて、読み手の方には御迷惑をおかけしまして、申し訳
ございませんでした。

さて、そろそろ内容の話を。

えと、まずは前々から本編における霊夢の立ち振る舞いが達観し過ぎて「歳不相応では？」という疑問を抱き『霊夢も迷いながら生きていく』ということを書きたかったんです。

このあと、秋、冬には霊夢が本編にガンガン登場するんですけど、今回みたく迷ったり、後悔したりしてる姿を書いておけば『霊夢も裏で色々迷いながら行動してる』という想像が出来るんじゃないかと思って、こんな話にしてみました。

んで、本編にも出てきましたが、この話数では『踏み出した足は元に戻せない』という事をお伝えしたいと思って話を書きました。

その時その時の結果がどうあれ、足を踏み出したら、もうその事実を受け入れるしかないんですよね。

かと言って、足を引つ込めたところで、それも一步にカウントされますよ？

『起きてしまった事実』は変えることが出来ないんです。

だから、本編の最後に登場した方も言っていたように『その時その時で出来ることを精一杯やる』ことぐらいしか我々には出来ないんです。

あ、ちなみに前に読んだ方はこの方の正体についてはオフレコでよろしく願いますね？

余談ですが、この『足を踏み出す』という行為は、キャラ作りをする上でかなり役に立ってます。

霊夢は、辛いことや苦しみを力に変えて、しっかり地に足つけて前に前にと進んでいくタイプ。

魔理沙は、とりあえず踏み出してから後悔するタイプ。更に言うと、前後左右色んな方向に踏み出していったって、結局元の位置に戻って来そうな気がしますw

アリスは、踏み出す前に色々考えてしまっって、結局踏み出せないタイプ。

って、感じで書き分けてます。

はい！堅っ 苦しい話終わりで、今回の萌えポイント〜！！

今回はなんつっても、『雨ん中傘差して魔理沙を待つ霊夢』ですね
！？（誰に同意を求めてんだ？）

「これは霊夢ならホントにやりそう！」と、思いながら書きました
（ドライな霊夢が好きな方、すみません！）

雨ん中で物憂う女の子って好きなんですよ！（いや、聞いてねえし
……）

ちなみに魔理沙とアリスは雨の中ですぶ濡れになりながら、泣かせ
てみたいです！（いや、んなこと言われても……）

ですが、残念ながらその願望は叶えられず、濡れ鼠になる魔理沙し
か書けませんでした……。今度ショートショートでも書く機会があ
ったら、やってみたいですね〜

えと、繰り返しになりますが、今回は読み手の方の事を考えず、自己満に走ってしまい、ホントに申し訳ありませんでした！

さぞかし、読みにくかったこととお察し致します。

にも関わらず、ここまで読んで下さった方がいらしたら、心からありがとうございます！！

もし、感想などありましたらどちらのサイトでも構いませんので遠慮なくお願いします。

では、ここまでお読みいただいた方に感謝を（今回はホントに！心の底からっ！！）素晴らしいBGMと作品を提供して下さる我等がZUN氏に最大級の感謝をしつつ……。

また次回お会いしましょう

P・S 先週、小説のアクセス数が100越えました！併せてあげ
がとつございます

第5話「ある秋の日のアリス」（前書き）

アリス「なんかさあ……」

私「ん？」

アリス「冷静になって読むと、私バカみたいじゃない？」

私「あれ？今ごろ気づいたの？」

アリス「なっ！分かってて書いたの！？書き直しを要求するわ！！」

私「もうおっそーい！更新ボタンぽちつとな」

アリス「キヤー！キヤー！！止めて！！」

第5話「ある秋の日のアリス」

暑い。

森や山の木々は、もう葉を散らし始めたというのに残暑が厳しい。独特の気怠い暑さのせいで、寝苦しい夜が続いていた。

窓を全開にしても、風が運んでくるのは生温い空気だけ。おかげで連日目覚めが悪い。

薬草を調合して作った虫よけのお香もストックがなくなってきて、そろそろ薬草を摘みに行かなきゃと考えながら床に就いたその翌日。「へくちっ！」

私は自分のくしゃみで目が覚めた。身を起こすと、肌寒さにひとつ身震いをした。

風が冷たい。どうやらやっと本格的に季節が秋に移ったみたいだ。私がベットから出ると、上海が冬物の長袖の着替えを持ってきてくれた。

服に袖を通しているうちに冷たい空気にも慣れ、着替え終わるころには空気が爽やかに感じられるようになった。

だけど、開けっぱなしはさすがに寒い。

窓を閉めようとカーテンを開けると、幻想郷の山々が少しだけ赤みを帯びているのが遠目にも見てとれて、紅葉を始めた山々を眺めながら秋風に身を晒すと、すっかり目が覚めた。

「さて、そろそろ朝食を作らなきゃ」

と、窓を閉めようとしたところで、こちらに向かってくる人影に気づいた。

「あれは……」

木々が葉の色を変え始めたそんな朝。

私の生活にもちよっとした変化が訪れた。

~~~~~  
~~~~~

「霧雨魔理沙？」

霊夢がきよんとしてこちらを覗き込んできた。

ちょうど季節が変わったあの朝、霊夢は納涼祭のお詫びと言ってわざわざワインを持って来てくれた。

納涼祭の一件で、深さの程度は分からないけど、少なくとも霊夢とあの人間の魔法使いが知り合いであることは確定していたため、霊夢が訪ねてきたときドアを開けようか少し迷った。

迷ったけど、霊夢に対しては特に悪い印象がない、と言うかむしろ好意的な印象しか受けていなかった私はドアを開き、素直にお酒を受け取った。

それ以後も、霊夢は貰い物をしたと言って何かと付け届けをしに来てくれて、そのまま帰すのも悪いと思ひ家の中に招き入れてお茶を振る舞った。

そうこうしているうちに、霊夢が家に来ることも、お茶を飲みながらたわいのない世間話をすることも、ごく自然なことになった。つた。

『聞き上手は話し上手』という格言がある。

人付き合いをほとんどしない、と言うか全く人と関わらない私は今一つピンとこなかったけれど、霊夢を見ているとその意味がよく解った。

霊夢は私の話をよく聞いてくれる。かと言って「私だけが一方的に話していてなんだか悪いな」と、思うことも無く適度に話を振ってくる。

仕事柄、里の人たちとの繋がりも強いらしくかなりの情報通で、引き籠っている私にはどれもこれもありがたい情報ばかりなので、つい聞き入ってしまうし、こちらからも話を返したり質問したりしているうちに、どんどん私の口も軽くなっていった。

「アリスの口から、他人の名前が出るなんて珍しいわね？」

だけど、いくら口が軽くなったといっても今のは我ながら軽率すぎたと、遅まきながら後悔した。

「いい香りね。これは紅茶のクッキー？」

この話題を続けたくない私が言葉に詰まっているのをよそに、霊夢はクッキーに手を伸ばし、口の中に放り込んだ。

「え、ええ……。生地に紅茶の葉を混ぜてみたんだけど……」

胸を撫で下ろしながら、お菓子の話に話題を変える。

霊夢が「美味しいわ」と、屈託のない笑顔で言ってくれたもんだから、クッキーの作り方から説明してしまった。

そうやって、また私の口が軽くなっていく。

対等な立場で話をしているはずなのに、主導権はずっと霊夢に握られたままのような気がする。

色々なことをどんどん話してしまう自分を客観的に見ると、まるで誘導尋問を受けてるみたいだと思っただけ、何故かそんな自分を見ても嫌な気分にはならない。

興味本位で私のことを詮索しようとするなら、私はきつと口を噤むはず。

おせっかいで私を訪ねてくるなら、私はきつと拒絶するはず。

優しさでもって私に関わろうとするなら、私はきつと逃げてしま
うはず。

そんな警戒心の塊のような私と普通に接して、尚且つ私の口をど
んどん軽くしていつてしまうこの博麗霊夢とはいったい何者なんだ
ろう？

と、不意に風が吹き抜けて家の中に木の葉を運んできた。

「あらら……。この時期の風は気持ちがいいけれど、葉っぱを散ら
すからイヤなのよねー。神社の境内も、掃いても掃いてもキリがな
くてさあ」

霊夢が境内掃除の愚痴を言いながら、部屋に侵入してきた葉っぱ
を拾い始めた。

「あつ！？そんなことしなくていいわよ」

窓を閉め、振り返えったところでそれに気づいた私は慌てて霊夢
を止めた。

「いいから、いいから」

だけど霊夢は楽しそうに手慣れた手つきでひょいひょい葉っぱを
拾っていく。

手伝わなきやと、箒と塵取りを用意した時には霊夢は一通り落ち
葉を拾い集めてしまっていて「はい」と、私が持ってきた塵取
りに落ち葉を乗せてきた。

「うーん。神社で掃除してる時はただのゴミにしか見えないけど、
こうして改めて見るとなかなか綺麗なもんね」

まじまじと木の葉を眺めている霊夢と紅く染まった葉っぱを見比
べて思った。霊夢は楓の葉のようだと。

葉っぱをゴミ箱に捨ててお茶を再開し、おしゃべりに興じながらも私は思案に暮れていた。

私は、他人同士は分かり合えないと思っている。

親兄弟や、夫婦、親友といった一般的に深いと言われている関係であっても、思考や時間を完全に共有しているわけじゃない。

それぞれがコンパスで描いた円の中心に自分を置くようにして自分の世界を作ってしまったている。

そうやって『自分と他のモノ』を分けて見ているうちに、自分を中心に世界が回っているような錯覚を起こし、自分の身の回りで起きた出来事、自分に関わった人、自分が見聞きしたことを自分勝手に解釈して自作自演の物語を作る。

そこから生まれるのは自己満足や責任転嫁。自分の描いたストーリーにそぐわないものはとにかく悪とする醜い考え方。

そんな風に自分だけの考えで溢れている円同士が触れ合ったらどうなるか？

いがみ合ったり、妬み合ったりするに決まっている。

大袈裟に考え過ぎかもしれないけど、大なり小なりいざこざが絶えない世の中を見ているとあながち間違っていないと思う。

他人同士の繋がりなんてそんなものだ。

頼れるのは魔法の糸の繋がりだけ。私と思考を共有している人形たちだけ。

そう信じてずっと人と関わらないようにしてきた。誰の世界ともぶつからないように過ごしてきた。

なのに、霊夢はさつき部屋に入ってきた木の葉のように、いとも簡単に私の世界に入ってきた。

風に任せて、ふわり、ふわりと空を飛んでいるから、自分の世界も他人の世界も関係ない。というより、もともとそんな線引きをしていない。

飾りっ気もなく、見栄もなく、ありのままの自分を受け入れることが出来るから、他人のありのままを受け入れることが出来る。

それは、普段色々なものにこだわりの執着して縛られてしまう私たちにはとても魅力的な生き方だった。

だからこそ、人も妖怪も関係なく彼女の周りに集まってくるんだらう。

「皆が皆、霊夢みたいに成ればいいのに……」

小声でぼそりと呟いてみた。

だけど、きつと霊夢みたいな人は稀な存在。そして、こんなことを言葉に起こしている私も稀な存在。

だから、やっぱり私は今のままでいい。

ぐるぐると思案を巡らせたくせに、結局いつもの結論にたどり着いたところで霊夢が腰を上げた。

「さて、今日もすっかり長居しちゃったわね」

外を見ると、空がうつすらとオレンジ色に染まっていた。

玄関の外まで見送ったところで「そうそう」と、霊夢が思い出したよう振り返った。忘れ物でもしたのだろうか。

「魔理沙ね……」

何の予備動作もなく霊夢の口からその人の名前が出ると、私の心臓が大きく音をたてた。

「私と知り合ったころはね……いや今もか。文字通り境内に飛んできてせっかく集めた葉っぱを散らしちゃうのよ」

何か答えるべきなんだろうか？それとも黙ってるのが正解？

「でね、こっちの都合もお構いなしに一方的に愚痴やらなんやらをぶちまけて帰っちゃうの。自分で散らかしたんなら掃除ぐらいしていつてほしいわ。いつも箒持ち歩いてるんだし」

そう考えたところで私に選択肢なんか無かった。

「ずっとそうなの。飛んで、飛んで、飛び回って、最後は私のところに飛んで来る。ずっとその繰り返し」

心臓の鼓動がどんどん早くなってきて、言葉を発する余裕なんて無かったからだ。

「ねえ、アリス？」

霊夢に名前を呼ばれ、波打つ胸を押さえながら顔を上げると、霊夢が真つ直ぐにこちらを見ていた。

秋の西日に照らされたその顔は、凜々しく、そして何故か寂しげにも見えた。

「アリスは、何で魔理沙がずっと飛び続けてるか分かる？」
分からない。

答えも、霊夢が何でこんな話を始めたのかも。

だから黙って次の言葉を待った。

「……ただ霊夢は「またね？」とだけ言い残し、軽く手を振ると私に後ろ姿を見せた。

「あ……」

思わず手を差し出したけど、霊夢の後ろ姿はどんどん小さくなっていく。

「……答えはおいていつてくれないの？」

「……なんだか宿題をだされたみたいない気分だった。」

あれから一週間経った。

霊夢はまだ答え合わせをしにきてくれない。

「もつとも、答えなんか出ていないから、合わせるも何もないんだけどね……」

にしても落ち着かない。

本を読んでいても、人形を作っても、いつの間にか霊夢が残っていた言葉の意味を考え、悶々としてしまう。

そして気が付くと霊夢が宿題の答えという手土産を持って、訪ねて来てくれないかと、窓の外を見てしまう。

最後に霊夢は「またね?」と言った。

と言うことは、きつとまた来てくれるはず。

だけど、霊夢の言う『また』とは一体何時のことを指しているんだろう?

「いっそのこと神社に行っちゃうとか?」

そう口には出してみたものの、すぐに首を左右に振って、自分の言葉を否定した。

私には霊夢と違って、会いに行く口実がない。

私が貰い物をするなんてありえないし、引き籠っている私には霊夢に面白い話題を提供することも出来ない。

「魔導書……」

と、本棚に並べられた魔導書を見やって、また首を振る。

霊夢は巫女であって魔法使いじゃない。

結界の話は私にはとても興味深かったけど、霊夢の役に立つよう

な情報はおそらくこの本棚には無い。

「お菓子を作って持って行くとか？」

今度はバスケットに盛り付けたお菓子を見やって、またまた首を振る。

それを出来るような性格なら、そもそもこんな生活をしていない。その他に何か口実に出来るようなものがないかと家の中を探し回ったけど、候補が見つかったそばから自分で否定するということを繰り返す不毛な時間が流れて行った。

「臆病なのよね、結局……」

家の中を一通り荒らしまわったところで、落選した口実候補達を眺めながらぼつりと漏らした。

私はただ丸腰で人と関わるのが怖いだけなんだ。

口実と言う名の盾を持っていなければ人に会いに行くことも出来ない。

霊夢なら手ぶらでも平気な顔してやって来るに違いない。

もちろん私は手土産がなくても喜んで霊夢を迎え入れるだろうし、私が手ぶらで神社を訪ねても霊夢は喜んで私を迎えてくれるはず。

実際そのくらいの仲にはなっている……はず。

でも『はず』は100%じゃない。

仲良くなったというのが私の勘違いという可能性がある限り何も持たずに訪ねていくのは……。

「やっぱり、怖いな」

我ながらずるい生き方だと思う。

誰とも触れ合おうとせず、家の中に隠れて自分の思い通りに動いてくれる人形だけと語らい、無償で会いに来てくれる人だけを待つ。「とても楽な生き方だわ。だけど、とても苦痛な生き方でもあるのね」

考え過ぎたのと家の中を荒らしまわったので、少し疲れてしまった私は椅子に腰かけた。

「どうしたのかな？こんなことを考えるなんて……。今までは上海

や他の皆がいればそれで十分だったのに」

と、言いながらも家の外を眺めてしまう。

何度見たって同じなのに。

「!?!」

同じじゃなかった。

私はその姿を見て、勢いよく立ち上がった。おかげで椅子が音を立てて倒れてしまった。

「あの、いつの時代の魔法使いよ? って、地味な白黒の服は……」
霧雨、魔理沙。

その姿を確認すると、しばらくぼかんとしていた私だったけど、その姿が近づいてくると立ちすくんでいるわけにもいかなかった。
「うえっ!?!? えっと……えっと……」

最近では霊夢が訪ねてくるので結界は張っていない。

このままだと彼女はやがて家に来る。

かと言って具体的な対応策も思いつかない。

散々あたふたした結果。

私はドアに鍵をかけてしまった。

「ど、どうしよう? 鍵かけちゃった……」

そのままドアにもたれかかるようにへたつと座り込んだ私は、ぶるぶると首を振って思い直す。

「いやいや。『かけっちゃた』て何よ!?!」

今までもそうしてきたのに、何を今さら。

それに、そもそも向こうが悪いんだから私が気にすることは無い。しばらくしてドアがノックされると、私はぎゅつと膝を抱えて目を瞑った。

そう。こうして今日もやり過ぎせばいい。

「え? な、何で?」

ドアがノックされるのに呼応するように私の心臓もばくばくと音をたて始める。

同時に夏に感じたのと同じ罪悪感を覚えた。

「何で？何で私が罪悪感感じなきゃいけないの？悪いのはどう考え
たって向こうじゃない！？」

と、今度は違和感を感じる。

「……あれ？でもそれってここまでしなきゃいけないこと？」

確かに悪いのは彼女。それは譲れないにしても、誠意をもって謝
りに来ているとするなら、それを拒絶するなんて少し狭量じゃない
だろうか？

心から反省しているかどうかは顔をみればわかること。それに本
人と話してみれば、こないだの霊夢の謎めいた言葉の意味が解るか
もしれない。

ごくつと、唾を飲み込み覚悟を決めると、立ち上がり震える手で
カギを摘む。

「あ、あと十回。あと十回ノックされたら鍵を開ける。いいわねア
リス？」

自分に言い聞かせ「あと九回、あと八回……」と、小声でカウ
ントしていく。

で、でもどんな風に対応したらいいかしら？

やっぱりここは都会派らしく優雅な笑顔で「いらっしやい」かし
ら？

いや、怒ってるところを見せるために「何？」くらいがちょうど
いいかしら？

いやいや、それだと心が狭いように思われてしまう。

ここは間をとって少し不機嫌そうな顔で「いらっしやい」。よし
！これだわ。

「って、あれ？今何回目だっけ？ていうか、もうノックの音聞こえ
なくない？」

慌ててドアを開けると、そこにはもう彼女の姿はなかった。

「何やってんのよ、私」

盛大にため息をつき、うなだれると飾りっ気のないバスケットが
目に入った。

「何これ？キノコ？」

バスケット一杯にキノコが盛られていた。見たことのない形だったけど、いい香りがする。

そういえば、高値で取引される香りのいい希少種のキノコがあると本で読んだことがある。

「くれる。つてことでいいよね？」

これを届けに来てくれたのだろうか？

「ちゃんと、お礼言いに行こう」

バスケットを抱えたまま家の中に入った。

すぐにでもお礼を言いに行きたかったけど、キノコがとてもいい香りを発するのでお昼前だけど食べてみることにした。そうすれば、味の感想から話題も広がっていくだろうし、彼女の心象も良くなるに違いない。

さて、こういう良い食材はシンプルに調理するのが一番。

適当な大きさに切り分け、フライパンで表面に焦げ目がつくくらい炒めて、塩コショウを軽く振る。

火を通すと、さらに香りが引き立ち、その香りにつられて皿に移すのも億劫になり、フライパンにのせたままフォークを突き刺し口に運んだ。

噛むごとに香りが広がって、ちょっとほろ苦いような甘いような複雑な味わいで、とても……。

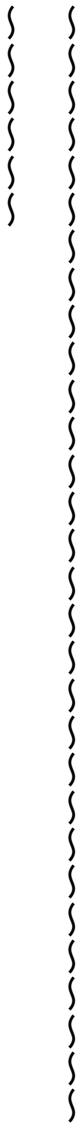
「とても……美味しいとはいえないわね。コレ。決まった調理方法でもあるのかしら？」

その辺も会ったときに聞けばいいかと思い、私は出かける準備をしようとして上海を呼んだ。

「上海。でかけるわよ。……あ、あれ？」

キッチンからリビングへ。たったそれだけの移動なのに、やけに遠く感じる。

足取りが重いような軽いような妙な感覚にバランスを崩し、そのまま目の前が真っ暗になった。



真つ暗な世界に少しだけ光が差し込んだような気がして、私は目を開いた。

「……………まぶし……………」

長い間黒い世界にいたせいか、こちらの世界の鮮やかな色彩が眩しくて、いったん目を閉じ、目を慣らすようにゆっくりと目を開いていと、ありえない光景が待っていた。

霧雨魔理沙がこちらを覗き込んできている。

ああ、まだ夢の中か。

「め、目が覚めたのか!？」

と、思ったら耳元で大きな声が聞こえて、私は目を見開いた。私はベットの横になっていた。いったいどのくらい意識を失っていたんだろう?

身を起こそうとしたけど、まだ体が重く、うまくいかなかった。

「ま、まだ具合わるいのか!？」

そんな私の様子を察した彼女が、ぐいっと身を乗り出して、おおいかがぶさるようこちらを覗き込んできた。

近い近い近いっ!!

「い、いやっ!！」

思わず彼女を跳ね飛ばして、毛布をかぶった。

「い、いったいどうやって入ったのよ!！」

気が動転しているせいか、必要以上に声を荒げてしまった。

「あ、あの……鍵開いてたし……それに……」

その言葉にカツとなり、身を起こして彼女を睨み付けた。

「鍵開いてたら、勝手に入るの!? それじゃ、泥棒と一緒にじゃない

!！」

「……っ!」

私の言葉に彼女が俯いて黙り込んでしまう。

痛々しい表情を見せる彼女に対して、感情の収まりどころを見失った私は追い打ちをかける。

「春はお花見を台無しにされたわ!」

「そ、それはっ……」

彼女が何か言いかけたけど、私はお構いなしにまくしたてる。

「夏はお祭りに誘っておいて、自分だけバカ騒ぎして!」

「……」

もう彼女は何も言ってこなかった。

俯いたまま肩を震わせている。

「秋は貴女のせいでこの様よ! このまま今年一年私の邪魔をするつもりなの!？」

一気に捲し立てた私は、肩で息をしながら彼女を睨み付け続けた。私の罵声を浴び続けた彼女は、俯いたままテーブルに立てかけていた箸を取ると、何も言わずに部屋から出て行った。

それを見送った私は、布団に潜り込もうとしたけど、あることに気が付いて身を起こし、おぼつかない足取りでテーブルに近寄りそれを手にする。

「これ……解毒剤？」

私の家には無いものだ。彼女が持ってきたのだろう。そう考えたところではつとした。

キノコを持つてきた時に、私は出なかった。

だから仕方なくそれを置いていったけど、食用ではないことを伝えていなかったから慌てて戻ってきた。

案の定私が倒れていたから解毒剤を飲ませてくれた。

冷静に考えればその流れが自然だ。

よっぽど憎い相手でもなければ、嫌がらせでこんな真似するはずがない。

確かに何も言わずにキノコを置いていったのは彼女だけど、直接受け取れなかったのは私のせいだし、何の疑いもなく口に入れたのも自分の責任だ。

「それを、私つたら感情に任せてあんな酷いこと言っちゃって……」
まだ、そう遠くへは行つてないはず。

早く追いかけて謝らなきゃと駆け出そうとしたけど、まだ完治していないのか、私の足元がふらついて転んでしまった。

「この大事な時にっ！！」

歯を食いしばり、壁や手すりに身を預けながらなんとか一階に下り、玄関のドアを蹴破らんばかりに勢いよく開けると、私は愕然とした。

「朝霧……」

森はうつすらと霧がかかっていた。太陽はまだ昇っていない。

「そんな……一晩中ついていてくれたなんて……」

きよるきよると辺りを見回すと、箒に跨って飛んでいる彼女の後ろ姿を見つけた。

追いかけてようと半歩踏み出したところで躊躇った。

遠ざかる彼女の背中中は、春に桜の木の下で見た彼女とも、夏に納涼祭で見た彼女とも違う。

別人なんじゃないかと思うくらい、寂しげで、儂げだった。

その背中が私に二の足を踏ませる事を躊躇させた。

「別人？何言ってるのよ？私が彼女の何を知ってるっていうのよ？言ってみなさいよ！！」

自分で自分に言葉のナイフを突き立てた。

「私も同じじゃない……。自分の目線からしか彼女を見ないで……。自分の意にそぐわない行動をとられると彼女の事情も考えないで感情的になって……」

そうやって、何度も何度も自分に言葉のナイフを突き刺していく。

「何が……違うのよ？……っ……つく……」

勿論、言葉のナイフでは血が流れることはない。

だけど代わりに眼から違うものが流れた。

「私が嫌うことと、私が彼女にしたことの……一体何が違うっていうのよおっ！？うあああんっ……！！」

喉の奥が熱くなり、私は堰を切ったように泣きじゃくった。

朝の澄んだ空気が、森の中に私の鳴き声を運んでいく。

泣いてもどうしようもない。

自分を傷つけてもどうしようもない。

それでも、私は自分を傷つずにはいられなかった。

自分は他の人と違う。と、思い上がっていた自分を傷つける以外の選択肢が見つからなかった。

私の世界も醜い。

醜い……。

だから、今度こそ本当に人と関わるのをやめよう。

私の世界に他人が触れないようにじゃなく。
私の醜い世界が他人に触れることのないように。

- t h a n k y o u f o r r e a d i n g -

第5話「ある秋の日のアリス」(後書き)

皆様、いかがお過ごしでしょうか？

お久しぶりの百合好きです。

いやいや、今回はホントに難産でした……。

書き始めが九月の中旬で。

「もう秋なのにアブラゼミが元気だなあ」

とかほざいてた頃になりますwww

なんで、冒頭部分の季節の変わり目の描写にそれを利用してみたんですが、もう涼しいじゃん!!(いや、最近ちと暑いですけど)

んじゃ、恒例になりつつある(？)言い訳という名の後書きに参ります。

今回の話は、春夏 霊夢パート(ここでいったん締めつつ繋ぎ)という流れを受けて、冬の最終回へと向かうお話なので、春夏のようにはアリスが。

「もう、魔理沙ったらー！プン！」

つてなったけど、魔理沙には魔理沙の事情ある。というだけに止まらず、それを具体的に文章化し、また、アリスが何で人と関わるのを避けてるのか、ということを書きつつ、次の魔理沙パート、さらには最終回の冬パートに繋ぐようなお話にしなくてはいけませんでした。

構成や書きたいことは大体決まっていたので、さほど苦戦しないだろうと思っていたんですが……小説って難しいねwww

二次小説なんで、キャラに無理がないように、且つ私が書きたい事を書きながらも、そして読み手の方に伝わるように。という三つのバランス取りに苦しみました。

特に、私が書きたいことと読み手の人に伝わるように。というところのバランスは難しかったです（今回はメッセージ性を強めたので尚更……）。

「この書き方で大丈夫かな？読んでる人が首捻んないかな？」

と、思いながらも自分の想いは端折りたくないというジレンマに陥り、数多の文字が生まれては消えていきました。

きつとバックスペースはお疲れに違いませんか。

イライラして踏み付けまくった床はご立腹に違いませんか。

階下に住む弟は寝不足になったそうです。

そんな、幾多の犠牲を払ってやっと産まれた今回の話。

相変わらず稚拙な文章ではありますが、その分血文字のごとく、一文字一文字に私の血を擦り付けるようにして書きました（表現グロいかな？）

ほい。

んで、今回は『人と人は本来理解し合えない』というのがテーマです。

話の真ん中くらいで出て来たアリスの地の文。『私は人と人とは分かり合えないと知っている』以降の部分。ここが私的には今回一番重要視し、そして一番苦戦した所でもあります。

これは霊夢パートでも『里の人は表面的な部分だけとらえて……』と、ちよつとだけ書きましたけど、人はどうしても自分目線でしか物を見ることが出来ません。

『出来ない』んです。これを。

「自分はものを見て考えることが『出来る』」

と、考えてしまうと自分以外のものを自分勝手な解釈でもって捉えてしまいます。

本文でも書きましたが、他人同士は思考を完全に共有しているわけではありません。

また、全ての時間を共有しているわけでもありません。

一日の中で、必ず一人の時間が存在します。

その時間の中で、色々な物に触れ、色々な事を考え、人は変わっていきます。

だけど、その時間が全ての人に平等に与えられている。自分以外の人も与えられている。という事を考えている人なんてほとんどいないはずです。

「あの人はこういう人」

という決めつけの上で人と接しているので、本当にその人を理解することが出来ないんです。

四季が移り変わるように人は変わっていきます。

嫌でも変わっていきます。

そこを理解しないと、自分の世界、自作自演のストーリーに他の人達を巻き込んでしまいます。

ふう……語り過ぎたから一回休憩……。

アリスはそれを理解していたのに、魔理沙に対して自分目線で見えていなかったことに気づきます。

さてさて、皆さんはどうでしょうね？

「自分は大丈夫」

って、人が一番危なかったりするんで、この話を読んで、一回自分の足元を見て貰えると嬉しいかなあと。

その他の話。

今回は霊夢がアリスと接触！！

この作中の霊夢大好きです（キリッ

結婚してほしいです！！

……というノロケ（？）は置いて……

今回霊夢に関しても、割と深いところまで書きました。

これの理由は上の方と同じです。

書かないって選択肢もあつたんですけど、前に『空を飛ぶ程度の能力』何物にも縛られない』って聞いたことがあったので、これをアリスと魔理沙の対比として活かさない手はないと思い、こういう形で使わせてもらいました。

ちなみに、夏パート同様この話の裏で悩んでる霊夢の話を思いついたんですけど、それは各々妄想して下さいwwww

いや、本音言つと私ももつと書きたいんですけどね。前回はあくまで本編の繋ぎとして書いたので、あんまり本編からそれるような話は書きたくないんですよ。残念ですが……。

あとほ……。

あ！アリスが泣くシーンは最後の難関でした。

「泣く？わぁあんっ……子供っぽいかな？うぁあっ……違うか？……
あぁあんっ……あれ？これなんかエロい。もう台詞には入れなくて
いいか？……いや、じっくりこないな……ん？なんかわかんなくな
ってきた……」

はい。泣き声がかんなくなりました。

私はけっこう涙もろいんで、よく泣くんですけど、無言派なので声
出して泣かないんですよ。

ただ、ここはアリスが思いっきり泣いたほうがいいと思ったので、
泣き声書こうとしたら書けなくて……wwww

いやぁ、意外な落とし穴でした。

はぁ……泣きじゃくるアリス可愛いなぁ……抱きしめたいなぁ……

おっと、失礼。

今回はかなり難しい文になってしまって、ホントはもっと詳しく説明したいんですけど、そうすると本文並の文字数になってしまうので、この辺で勘弁して下さい。

もし意味がわかんないという人は、こちらでもブログのほうでも構いませんので、質問しちゃって下さい。

それでは、ここまでお読みいただいたあなたと、偉大なる原作者であるZUN氏に感謝しつつ……。

また次回へ

第六話「ある秋の日の魔理沙」(前書き)

「全然百合じゃねえじゃねえか!」と、思っていた皆様、お待たせしました。

第六話「ある秋の日の魔理沙」

空が飛べるようになった時こんなに嬉しいことはないと思った。
これで違う世界に行ける。

違う自分になれる。

そう信じて空を飛び続けた。

だけど、違う世界なんて存在しなかった。

空は果てしなく続き、地平線の彼方は霞んで見えないのに、世界は繋がっている。

そんな事実を認めたくなくて、私は毎日箒を取った。

飛んで、飛んで、飛び続けた。

そして、見つけた。

私が目指すべき場所を。

だけど、どうやったらそこにたどり着けるのかが分からない。

分からないから箒を取る。

その場所は確かに存在するのに、いつになっても辿り着けない。

行きたい場所に行けない私の魔法

純粋な力勝負でも簡単に負けてしまう私の魔法。

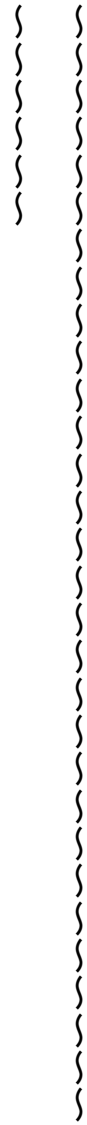
魔法は、霧雨魔理沙を『魔法使い』として自他に認識させてくれる最後の一線。

その魔法ですら、存在意義が無くなってしまったら、私という存在も存在意義を無くしてしまう。

私の魔法はなんのために存在しているんだろう？

私はなんのために存在しているんだろう？

「行くわよっ！」
少し肌寒いと感じた朝。



寝ぼけ眼で毛布を追加し二度寝に入ろうとした時、霊夢に布団を引っぺがされた。

「寒い！寒い！寒い！」

昨日の夜まではまだ少し蒸し暑く、いつもの寝巻で寝ていたため、冷たい空気が身に染みだ。

「霊夢！いきなり何すんだ！？返せよっ！！」

奪われた布団を取り返そうと霊夢に飛びかかったけど。

「甘い」

あっさりと躲され、勢い余った私は顔から床に落っこちてしまった。

「ふふ。これで目が覚めたでしょ？」

鼻をさすりながら顔を上げると、霊夢が楽しそうな表情を浮かべていた。

「もうちよつとスマートに起こしてほしかったぜ……」

文句をいいながら本の山をかき分けクローゼットにたどり着いた私は冬服に袖を通した。

冬服と言っても長袖で生地が厚いだけのお決まりの白黒の魔導服だけど、これを着ると気分が憂鬱になる。

私は冬が嫌いだった。

だから必然的に冬服も嫌い。

そのため、冬服がしまつてあるクローゼットは一番本が密集している地帯に配置してあった。

「さあさあさあ！！着替えたんならとつとと行くわよ！？」

どんよりとした私の気分を吹き飛ばす様に、手をパンパンと叩きながら霊夢が声を張り上げた。

そういえばさつき起こされた時も「行くわよ」とか言ってたような気がする。

どこか面白い場所でも見つけたんだろうか？

「もしかしてデートのお誘いってやつか？」

と、「冗談を飛ばすと何故か霊夢は額に指を当てて大きくため息を

ついた。

「そういう軽口をアリスの前でも叩ければねえ……」

いきなりその人の名前が霊夢の口から出てくると、心臓が飛び出るんじゃないかというくらい大きく音をたてた。

同時に罪悪感と自己嫌悪が襲ってくる。

納涼祭の一件以来、出来るだけ彼女のことは考えないようにしてきた。

思い出すと自分のバカさ加減に嫌気がさすからだ。

最近では大分マシにはなってきたけど、それでもせつかく来てくれたのにほったらかしにされた彼女の気持ちと、お膳立てしてくれたのにぶち壊しにされてしまった霊夢の気持ちを見ると、胸がモヤモヤして、気分が落ち込む。

そんな私の気持ちを理解してくれている霊夢は、彼女のことは口にしなくてくれたのに……。

「あ、あいつは関係ないだろうっ!!」

落ちてしまいそうな自分を、声を荒げて奮い立たせようとしてみたけど無駄だった。

私の心に発生した自己嫌悪という名の霧は確実に広がっていく。

「関係あるわよ」

いつもなら私が落ち込みそうな時にはすかさずフォローしてくれる霊夢なのに、今日はやけに頑なだった。

「ないだろうっ！そんなことより出かけるんじゃないのか!? さっさと行くぞ！」

出かけてしまえばこの話題がぶり返されることはないだろうし、気分も晴れるかもしれない。

そう考えた私は強引に話を切って、出かけようとドアノブに手をかけた。だけど。

「いいけど、今日のデートの目的地はアリスの家よ？」

という霊夢の言葉で手が止まった。

「どこに行くって？」

「アリスの家って言うてるでしょ？」

聞き間違いであることを祈ってもう一度尋ねてみた。

「……どこに行くって？」

「アリスの家！何回言わすのよ！？」

文字の意味を理解すると、言葉の意味を理解するのは全く違う。アリ……。『彼女の家に行く』という文字としての意味は理解した。

だけど、それに私の気持ちや置かれている状況、それらを加味した時に「そうなのか！じゃあ行こうぜ！」と、即座に答えられないのが人の口から出る言葉の難しさ。

これはヘタな魔法の術式よりも難解だ。

「えと……。何しに行くんだ？」

この術式を解かないことにはこのドアノブは回せない。

ということ、とりあえず真っ先に浮かんだ疑問を口にしてみた。「あんだ、納涼祭での自分の大失態を忘れたの！？謝りに行くに決まってるでしょ！」

どうやら霊夢の中では解はもう出ているらしい。

「今回は出血大サービスで私が一緒について行ってあげるから、さつさと酒蔵からワイン取ってきなさい」

「うぐっ！な、何でそれを……」

実のところ私の中でも解は出ていた。

機会を見て謝りに行こうと無理をして上等なワインを買っておいただけ、なかなか踏ん切りがつかず、蔵にしまえばなしになっていた。

「こないだ買った魔導書でもいいわよ？それともその可愛くラッピングされたお菓子にしとく？じゃなきゃ……」

霊夢は私がお詫びの品として彼女に持って行こうとした物を全部把握していた。

「なんで私の行動が霊夢に筒抜けになってんだよ！」

「ふふん。私の情報網を甘くみないでよね。魔理沙がいつもと違う

行動とつてたらすぐにわかるわよ」

霊夢は何てことないって顔だったけど、私には全然わからなかった。

仕事柄、里の人との繋がりがあるため色々な情報を手に入れる事が出来るのは分かる。

だけど、それがイコール彼女へのお詫びの品を買い漁ってるという事には繋がらないはずだ。

「分からないって顔してるわね。いいわ、教えてあげる」

霊夢は得意気な顔で話し始めた。

「まずワイン。ポン酒派のあんたが上等なワインを買ったって聞いた時点でおかしいと思ったのよ。で、次に魔導書。店主が魔理沙が金を払って魔導書を買って行ったって珍しがってたわ。あとはお菓子よね。自分で食べるためにわざわざ綺麗にラッピングしてもらわないわ。ここで、多分これらは誰かにあげるために買ったって推理したわけ」

と、流れるように解説していく霊夢を見て、巫女を辞めて探偵でも始めた方がいいんじゃないか？と思ったけど口には出さないでいた。

「ま、確信したのはさっき魔理沙の顔を見た時だけだね」

という言葉で霊夢は解説を締めくくった。

「納得した？納得したならもういいでしょ？行くわよ」

霊夢の話に聞き入っていて、いつの間にかドアノブを離していた私に代わって霊夢がドアノブに手をかけた。

「怖いんだ」

ドアが少しだけ開けられたところで私はぼつりと漏らした。

「うん？」

外に出ようとしていた霊夢は、その私の言葉を聞くと開きかけたドアをそのままにして私の方を向いた。

「美味しい酒を持って行っても、綺麗にラッピングされたお菓子を持って行っても、珍しい魔導書を持って行っても、持って行くのが私

じゃダメなんじゃないかって。この中のどれかに彼女の好きなものがあつたとしても、私が行つたんじゃないやまたドアを開けてくれないんじゃないかって」

私は今どんな顔をしているんだろう？

「もしこの中に彼女の好きな物があつたする。それでもダメだらつて考えるのが怖いんだ。それは私に対する拒絶だろ？私が否定されたらつて思うと息が出来なくなるくらい苦しくなるんだ」
きつとまた情けない顔をしているに違いない。

霊夢は開きかけたドアをいったん閉めると、私の頭の上に手を置いた。

「大丈夫よ。今日は私もついて行つてあげるから」

そういつて微笑みかけてくれた。

「だけど、それで霊夢まで嫌われたら……」

ただでさえ迷惑をかけているのに、これ以上霊夢に負担をかけるのは気が引けて仕方なかった。

「いいのよ。自分以外の全員に好かれることなんて出来ないんだから。たまたま嫌われる相手がアリスつてことだけでしょ？」

「でも……」

やっぱり気が引けた。というより嫌だった。

霊夢が誰かに嫌われるのは、自分が傷つく以上に嫌だと思った。

当の霊夢はというと、大きいため息をついて。

「分かつた。何の準備もさせないで引つ張つていこうとした私も悪かつたわ」

諦めたのか？と、私は内心ホツとしたけど甘かつた。

霊夢が一度決めたことを簡単に諦めるはずがない。

「今まで魔理沙が買い漁つた物は一つずつ私が持つて行くわ。これらが全部無くなるまでが魔理沙の準備期間。全部無くなつたら会いに行く。いいわね？」

決めたことはたとえ遠回りになろうとやり遂げようとする。

それが私の親友、博麗霊夢という人間だった。

「寒い……」

~~~~~

もう冬と言ってもいいような空気を浴びて、自分の手を自分の息で温めた。

私は悩んだ挙句、霊夢の案を呑んだ。

霊夢は二、三日置き、あるいは一週間置きにと、うまく間を置きながらどんどん私が買った物を運んでいく。

最初に持つて行ったワインを彼女が受け取った時「ほら、大丈夫だったでしょ？」と、霊夢は笑っていたけど、それは持つて行ったのが霊夢だからであって、受け取る、受け取らない以前に私が行ったら、ドアすら開けてくれないんじゃないかと思ってしまう。

「結局霊夢に上手いこと丸め込まれたのかな？」

と、口に出した自分の言葉を首を振って否定した。

霊夢は彼女が家に入れてくれるって確信してたみただけど、確率は100%じゃない。

自分では「いいのよ」なんて言ってたけど門前払いを受けて平気でいられるわけがない。

要は露払い役を自ら買って出してくれたんだ。

何で霊夢は私にここまでしてくれるのか？

魔法使いとしても人としても二流止まり。

魅力なんてこれっぽっちもない。

なのに霊夢はいつも助けてくれる。

絶妙のタイミングで手を差し伸べてくれる。

重いものは一緒に持つてくれる。

ここまでされて動かなかつたら、今度こそ霊夢に愛想をつかされてしまうんじゃないかと不安になった私は森に出かけた。

目的はこの幻想郷にしか生えないキノコの採集だ。

飲食物も喜んでいただけ、魔法関連のものの方が喜ばれたと霊夢は言っていた。

だから食用のキノコではなく、魔法の研究に使えるキノコを持つて行くかと考えた。

とは言え、実りの秋はもう過ぎつつあり、採集はイマイチはかど

らなかった。

木の根元をかき分けると、霜が降りた土が氷のように冷え切っていて手がさらに悴んだ。

手の感触がなくなりそうになるたびに息を吹きかけたけど、気休めにしかならなくなってきた。

「ふう……。こんなもんかな？」

持ってきた籠がいつぱいになったところで、一息ついて家に向かった。

「あら？魔理沙？」

と、上から聞き慣れた声が降ってきたので、声のした方を見ると霊夢がふわりと上空から降りてきた。

「出かけてたの？」

「ああ。こいつを集めてたんだ」

霊夢の問いに、籠いつぱいに集めたキノコを見せながら答えた。

「もう冬って言うてもおかしくない時期なのによくこんなに集めたわね。……って、魔理沙！手！血出てる！！」

籠のキノコを見ていた霊夢が私の手を指差して叫んだので、私も自分の手に目をやると、確かに小指からちよつとだけ血が出ていた。

「あ……。葉っぱかき分けたりしたからな。こんくらい舐めときゃ治るぜ」

と、自分でぺろりと血をな舐め取っていると。

「こら！そんなんじゃダメよ！」

霊夢は怒気を含んだ声で私を嗜めながら、服の袖を破って私の指に巻きつけた。

「まったく……。化膿でもしたらどうするのよ？趣味に熱中する気持ちは分からなくもないけど、自分のことをほったらかしにするのはいただけないわよ？」

怒りながらも、霊夢は苦笑いを浮かべていた。

巻きつけられた服の切れ端を眺めると、霊夢の優しさが鉛のように重く感じられた。

おせつかいとか思ったわけじゃない。

『変わりたい』なんて思っているくせに、自分を傷つけたり、卑下したりと楽な選択してしまう私には霊夢の優しさを受け止められるだけの器が無いんだ。

霊夢のように、可能性がゼロじゃない限り絶対に諦めない、あるいは可能性を少しでも百に近づけようと努力する生き方の方がずっと苦しい。だけど魅力的だ。

私が目指しているのはそんな生き方。

霊夢のような生き方が私の目的地。

なのに、いつもいつも肝心なところで諦めてしまう。

だから結局変われず仕舞い。

「へえ！アリスのためにこのキノコをね！なかなかやるじゃない！ちようど次に持つて行く魔導書で魔理沙が買ってきた物は全部無くなるし、そしたらアリスの家に行きましょう！？大丈夫よ！私も途中までついに行つてあげるから！！」

道々で今日採集したキノコの説明をしていると、急にテンションが上がった霊夢が私の背中をバシバシ叩きながら早口でまくし立ててきた。

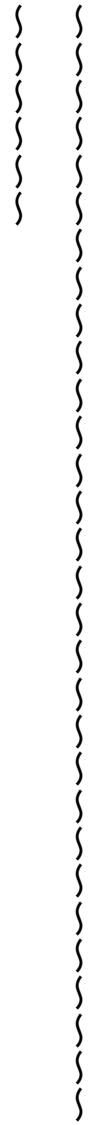
「あ、ああ……。ここまでされて何もしなかったら、さすがに霊夢に悪いからな」

霊夢から逃げながら言うと、満面の笑みで私を追いかけながら背中を叩いていた霊夢の手が止まった。

振り返ると、何故か霊夢は複雑そうな表情を浮かべ。

「そう……」

と、ぼつりと呟いた。



最後の一品である魔導書を霊夢が持って行ってから一週間。  
今日が約束の日だった。  
昨夜は色んなことが頭に浮かんでほとんど寝ていないのに、全然  
眠くない。

ベットから起き上がり着替えを済ませると、とりあえず何か腹に入れないと思いいルクを温めてちびちびと喉に通す。

三分の二ほどを呑み干したところで、玄関のドアが開いた。

「準備、いい？」

挨拶もナシで霊夢が言っていると、私は籠を腕にかけて立ち上がった。

「妖怪相手に決戦を挑もうってわけじゃないんだから、そう怖い顔しないの」

霊夢は私の頭にポンと手を置いた。

緊張を解そうとしてくれているんだろうけど、霊夢の顔も心なしか強張っているように見えた。

外に出ると、あとはお互い無言で空を飛んだ。

そして彼女の家が近づいた時。

「じゃ、私はこの辺で……」

「ああ……」

それが表に出てから交わした最初で最後の会話だった。

霊夢が一足先に地上に降り、続いて私も地上に降りた。

ここからは自分の足で彼女の家の玄関に向かう。

一歩足を前に出すごとにドクン、ドクンと心臓が音を立てた。

嫌でも襲ってくる「やつぱりダメなんじゃないか」という考え。

そんな弱い自分と戦いながら歩みを進め、彼女の玄関の前に立った。

最近では霊夢が訪ねてくるためか結界は張っていない。

大きく深呼吸をしてゆっくり拳をドアに近づける。

そして、強すぎないように、弱すぎないようにドアをノックした。

返事はない。

もう一回ノックしてみた。

反応は無い。

手が震え始めた。

その震えを必死に抑えながらも一度ノックした。

誰も出て来ない。

ここまでくればもう半分ヤケだ。

どうせならと、しつこいくらいにノックしてやった。

それでも無反応。

いっそ清々しい。

愛情の裏返しは憎しみじゃなく無関心。

まさに今の状況じゃないか。

これだけ五月蠅くノックしてやったのに怒りにすら出てきてくれないなんて。

これは完全なる私への拒絶に他ならない。

「もう、いいよな？」

誰に言っわけでもなく一人ごちると、籠を置いて箒に跨り飛び出した。

「魔理沙！」

霊夢が後ろからついてきた。

今は一人になりたい私は無視して飛び続けた。

「魔理沙ってば！！！」

それでも霊夢はしつこくついてきた。

だけどスピード勝負では私の方が上だ。

このまま一気に振り切ろうとした時に、霊夢はいきなり私の前に立ちはだかった。

「うおっ！！！」

なんとか箒の方向を変え、すんでのところで霊夢を躲した。

「な、何考えてんだお前！！！」

さつきとは違う意味で心臓がドキドキした。

生身の人間にあのスピードでぶつかったら大怪我ですめばいい方だ。

「はっ……はっ……。い、いいの!？」

霊夢は肩で息をしながら私に尋ねてきた。愚問だ。

「いいも何も、見てただろ!？もういいんだよ!!！」

「そうじゃなくて!!！」

私は大声で叫んだけど、間髪入れずに霊夢がそれ以上の声で叫んできた。

「あのキノコ食用じゃないんでしょ!？」

「そうだけど……。それがそんなに慌てることか？」

珍しく霊夢が慌てていたけど、私には何をそんなに慌てているのかが理解出来なかった。

「しかも、幻想郷にしか生えてないキノコなんじゃないの!？もし、間違っただけでもしたら……」

私はやつと事態を飲み込んだ。

貴重な魔法の研究材料つてのは体に悪影響を及ぼすものが多い。

あのキノコも例に漏れず、人体には猛毒だ。

「霊夢！乗れっ!!！」

私は霊夢を箒に乗せると、全速力で踵を返した。

彼女の家の前でブレーキをかけると、二人で飛び込むように家中に入った。

「……っ!!」

きよろきよろと辺りを見回すと、リビングで倒れている彼女と、いつも彼女のそばにいる人形が心配そうに彼女を見つめているのが目に映った。

「アリスっ！アリス！大丈夫!？」

霊夢が駆け寄り、声をかけるけど変事はない。

「すごい熱……。これ、危険よ……」

「霊夢！とりあえずベットに寝かしてってくれ！その場しのぎかもしれないけど冷えたタオルをあてていてくれ！私は解毒剤取ってくる!!！」

もしかしたらこの家にもこういう時のための解毒剤があるかも知れないけど、勝手の分からない人の家を漁るよりも自分の家に行つた方が早いと判断した私は、言うなりすぐに自分の家に向かった。



一瞬にも、とてつもなく長くも感じられた時を過ごして私は彼女の家に戻ってきた。

「一応何回もタオル換えてるんだけど、すぐに熱くなっちゃって……。魔理沙の言った通り、その場しのぎにしかならなかったわ」  
彼女を見ると、苦しそうにうめき声をあげていた。

妖怪だから私達よりこういうたものへの耐性は強いだろうけど、最悪の場合はありうる。

それに、もし一命を取り留めたとしても後遺症が残る可能性だつてある。

「早くこれを飲ませないと。霊夢！水くれ！」

「効くの？」

私にコップを手渡しながら、霊夢が聞いてきた。

「ああ。万が一劇薬を摂取してしまった時のために用意した解毒剤だ、絶対に効く」

私は薬を水に溶かしながら答えた。

「だけど、どうやって飲ませるのよ？アリスはこんな状態よ？」

その霊夢の言葉で私は固まった。

彼女は息こそしているものの、意識は無いのと同じような状態だ。とても水を喉に通してくれるとは思えない。

「え！？ちよつと！！？どうすんのよ！？」

固まってしまった私を見て、霊夢が慌て始める。

「いや……。こういう状態になった時、薬を飲ませる方法があるにはあるんだが……」

私が歯切れ悪く言うと、霊夢はさらに慌てて。

「なら早くしなさいよ！これじゃ薬持ってきた意味無いでしょ！？」  
私を急かした。

一瞬迷ったけど、もう他に選択の余地は無い。

「……分かった。じゃ、悪いけど部屋の外に出ててくれないか？」

私の言葉に霊夢は怪訝そうな表情を浮かべた。

「はあ？何でよ？」

「うるさいな！魔法使いの秘密つてやつだよ！いいから出てる！」  
なおも疑いの目で私を見てくる霊夢だったが、彼女の治療を急がないと思つたのか「早くしなさいよ？」と言って部屋を出た。

霊夢が部屋を出たのを確認してから彼女に近寄ると、熱のせいか赤みがかかった妙に色っぽい顔が目映った。

「いやいやいや！そんなこと考える場合じゃないだろ！」

と、自分の頬をバチンと叩くと息を整え薬を溶かした水を口に含んだ。

顔を寄せ、意を決すると。

私は彼女に唇を寄せ、口づけた。

私は口の中にあつた水を全部流し込むと、唇を離した。

自分で薬が飲めない時薬を飲ませる方法。それは口移しだ。

緊急時だから、もちろん性的な意味合いは無いけれど、それでも霊夢に見られてるってのはさすがに恥ずかしかったので席を外してもらった。

最初の一回で多少免疫がついた私は、二回、三回と繰り返してコップに入った水を全部彼女の喉に通すことに成功した。

「どうやら飲み込んでくれたみたいだな」

この薬の効き目は信用していい。

だから飲み込んでさえくれれば後は意識が戻るのを待つだけだ。

ふう。と、自分の手で口を拭くとさっきのことを思い出してしまった。

「があああああつ！ー！」

恥ずかしさのあまり、自分の頭をがりがり掻いて頭の中から消し去ろうとすると。

「何っ！？どうしたの！？」

部屋の外に出ていた霊夢が飛び込んできた。

「い、いやっ！何でもないぜ！？ほら！薬もこの通り全部飲んだぜ

!？」

自分でも明らかに挙動不審だと思つような動きをすると、また霊夢は眉を寄せたけど。

「あら？呼吸が整つてきたわね。脈も落ち着いてきたし」

彼女の様子を見ながら手を取つて脈を測ると、ほうつと息をついた。

そこからは、二人で彼女を看病し、日も暮れた頃。

「魔理沙。後は私が付いてるからあんたは帰んなさい。昨日もほとんど寝てないんでしょ？」

言われてようやく体がだるいのに気が付いた。

昨日寝ていない上に、昼間の騒ぎで何回も全速力で箒を飛ばしたせいだ。

だけど自分がしたことの責任くらいは自分で取りたかった。

「いや。霊夢こそ戻ったほうがいいんじゃないのか？博麗の巫女があんまり長い時間神社を空けるつてのはよくないぜ？」

霊夢は、私を見て少し迷った風だったけど。

「そうね。そうさせてもらうわ」

と、意外とあっさり引き下がった。

「あんまり無茶したらダメよ？魔理沙もちゃんと寝なさいね？」

そう言い残して霊夢は帰ったけど、私は寝るつもりなんてさらさらなかった。

彼女が目を覚ます時まで絶対に起きていようと、目を覚ました時にちゃんと謝ろうと決めていた。

~~~~~  
~~~~~

「けどそれは叶わなかった。

目を覚ました彼女は私に次から次へと厳しい言葉を浴びせてきたからだ。

「春はお花見を台無しにされたわ！」

それは……。あの桜が……。

「夏はお祭りに誘っておいで、自分だけバカ騒ぎして！」

夏のことに関しては、返す言葉もない。

「秋はあなたのせいでこの様よ！」

今回のこともそう。

だけど私にだって言い分はある。

私は人間なんだ。

自分の意志をもった人間。

考えナシに生きてるわけじゃない。

失敗もする。

だけど、人並みに反省もする。

人に迷惑をかけたなら謝らなきゃとも思う。

そして……。

分かり合いたいとも思う。

「このまま今年一年私の邪魔をする気なの!？」

なのに、彼女はこんなにも遠い。

たった一言、「ゴメン」すら言えない。

気持ちの一片すら伝わっていない。

もう、いいや。

こんな辛い思いをして、なお可能性を追い求めようなんて思わない。

彼女にこんな顔をさせて、なお分かり合おうなんて思わない。

もう……。

いいや……。

『普通』のままです。

辿り着けなくて、いいや。

-  
t  
h  
a  
n  
k  
  
y  
o  
u  
  
f  
o  
r  
  
r  
e  
a  
d  
i  
n  
g  
  
-









第六話「ある秋の日の魔理沙」(後書き)

どうも、忘れられたんじゃないかと不安なゆりすきでございます。

取り急ぎ更新だけさせていただきます。

後書きはまた後程ってことで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8712s/>

---

『アリスと魔理沙』

2011年11月30日13時52分発行